水端の姫君

晴井 雨菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
水端の姫君

【Ｎコード】
Ｎ９７１５Ｐ

【作者名】
晴井　雨菜

【あらすじ】
あるところにそれはそれは美しい“真珠姫”というお姫様がおりました？？？？しかし心優しい姫君は、いつしか渦中の底に突き落とされ不幸になってゆくのです。　そんな昔々のお話を語りましょう。不幸にも真珠姫と呼ばれ、敬われた彼女がどうやってこのクラフィティア王国を救ったのか。その王国千年史を私が語りましょう。彼女の心を真に奪うことが出来たのが、誰だったのかを――――

始まり（前書き）

１５Ｒとしましたが、そのような描写が出てくるのは一部です。
そういった描写の出る話の前書きに、その旨を記載しますので、
ご安心ください。

始まり

私はたくさんの人に愛されています。
ふふ、まずは父様と母様。それから姉様に、私の下にいるかわいい妹。ああ、兄様もいらっしゃったわ。

ほら、ね？　こんなにもたくさんの人に愛されているわ。
もちろん私も彼らのことを愛しているし、そうね、相思相愛かしら？

でもねそれだけではないの。
私はこの他にも六十万以上の私の民を愛していますわ。
民が私のことを好いてくれているかはわからないけれど、確実に私は彼らのことを愛しているの。

スースティア王国第二王女として、すべての民を心から愛しておりますのよ。

彼女の日常

ある日のこと。
強く射抜くような日差しが和らいできた、そんなころ。今は一年のうちの水蜜（みずみつ）の月。そのために正午を超えてしまえば日差しは途端に柔らかく、包み込むようなそれに変わる。

正午を数刻超えた花の刻である今は、まさに一休みするには最適な時間なのだ。

そんな時間。スースティア王国第二王女、メイリアは公務を終えたばかりだった。
王都エルザの孤児院へ行き、そこに居る親の無い子供たちを励まして衣服を寄付して来たのだ。
その寄付した服というのは決して国庫からの支出で買ったものではなく、メイリア自身が慈善事業で集めた古着などを繕って作ったものである。
それにはもちろん侍女が手を出したものも入ってはいるが、それでもほとんどと言っていいほどメイリアが作り上げたものだった。

なぜ現金での支援をしないのかといえば、孤児院にお金が渡るまでに愚かな役人が懐にしまい込んでしまうという事件が先日発覚したばかり故だった。
いまだ打開策とそれに関する法を整備するに至っていないため、法整備が進むまでは孤児院支援を第二王女直轄で行うと国王である

メイリアの父が議会の承認を得て決めたのだった。
ひそかに子供たちの喜んだ顔を思い出し、微笑んでいると侍女がメイリアに声をかけて来た。
「メイリア様、ドレスの採寸のお時間でございます。仕立て屋が来ておりますので、お通ししてもよろしいでしょうか？」
そういえばドレスの採寸が予定に入っていたかも、と無頓着に思い返事をした。
「ええ、お通しして頂戴」

のどかで平和だ、ということを良い国の定義とするならば、このスースティア王国はこのダヤ大陸において一番に良い国だろう。争いもなければ、大規模な飢饉もない。
それ故に賢王と讃えられる国王リーチャースを筆頭に、スースティア王族は民にとても慕われていた。
その王族の中でも特に民より熱烈な支持を受けていたのが、第二王女メイリアである。

長い長い漆黒の髪。深い森のような、けれど宝石のように透き通った緑色の瞳。
肌は絹のごとく輝きを放ち、髪、瞳と相まってそれは美しい。
しっかりとした意思のこもる瞳は慈愛に満ちあふれ、まるで彼女自身がこの国を体現しているようだと。
優雅な物腰、常にある彼女の微笑みは何にも勝る国の宝だった。

だれからも愛される国の至宝。
第二王女、メイリア姫。

こんこん、とならされた扉を侍女があけるとそこから部屋へ入って来たのは身なりの整った男と、お針子であった。――瞬間、彼とメイリアの視線が合う。男は慌てたように礼を取った。

「仕立て屋のブルーナと申します。メイリア・リュース・ミナ＝スースティア姫様におかれましてはご機嫌麗しく存じます。貴女様にお目にかかれましたこと、一生の宝にしたく存じます」

丁寧な言葉を並べながら最高の礼をとる男に、メイリアは立ち上がってそばに寄った。

「はじめまして。わざわざ王宮まで出向いてくださって感謝いたします。では、来て早々に申し訳ないけれど、早速採寸を始めてもらえるかしら？」
「はい、もちろんです」

メイリアはとても美しかった。
外見の美しさはそれはもう、この世のものとは思えないほどである。
それゆえに王宮の詩人たちはこぞって彼女の詩を読みたがるが、彼女の完成された美しさを表すには、彼らの言葉というのはどうも陳腐になりがちであった。

――ある者は彼女を花に、またある者は彼女を蝶にたとえた。

だけれどそれらの言葉がメイリアを正確に表す事ができているのかと問われれば、それは否やと答えるしかないほどに未完成なものだった。

至上の神がメイリアに贈った宝である彼女の容姿を、人間が作り出した言葉で例えられるのであろうか。その問いの答えは否である。

――――あえてたとえることを許されるなら、その言葉はきっと女神であろう。

そんな風に言われるほどに彼女は美しかったのである。

けれども外見が美しい姫君など、各国に掃いて捨てるほど居る。

その中でメイリア姫が殊更美しいといわれるその真の理由は、彼女の内面にこそある。

自分より身分の低い者を人と思う事すらしない王侯貴族の姫君が多い中、メイリアは違う。自らよりも他者を思いやれる心、つつましくだれよりも控えめで可憐。

やさしく、だれにでも分け隔てなく接するというその姫。

愛情を振りまき、救いを求める人々を決して無下にはしない、臣下に対してでさえ礼節をわきまえる彼女の心は多くの人を虜にするのだ。

「さすが真珠姫様と呼ばれるメイリア様でいらっしゃいます。とてもお美しいです」

お針子による採寸を終えたメイリアに、ドレスに使う生地を吟味していたブルーナが声をかける。言われたメイリアは嬉しそうに目を細めた。

「ふふ、ありがとう。父様がくださったこの『真珠姫』の二つ名にふさわしくあらねば、ね。でも私は容姿などどうでも良いのよ。――あえて言えば貴方のつくるドレスが似合えばそれでいいの」

「もったいないお言葉でございます、姫様……」

採寸をしながらメイリアとブルーナは談笑に花を咲かせた。

真珠姫――

それは彼女が名乗る、“二つ名”である。

スースティア王国のあるダヤ大陸では、各国王族は成人と同時に二つ名を定めるという古いしきたりがある。

その二つ名は時には民の声から、時には婚約者から贈られ決めるという場合もある。しかし基本的には自分で決め、生誕祭のときに己で宣言し広めるものであるが、時としてその基本に則らない場合もある。

メイリアの場合はまさにその“基本に則らない場合”である。

彼女の二つ名は彼女の父親、スースティア国王であるリーチャースが決めたのだ。

『神秘的で何もいわずとも美しい。そしてその内面にこそ真の美しさが隠れている。――――お前はまるで真珠のようだ』

この一言からはじまり一月（ひとつき）ほど前の成人の儀のときに、メイリアは自らの二つ名を『真珠』としたのだった。

このダヤ大陸で用いられている暦は“水歴”という。この暦はその名のとおり、水を基本として考える暦なのだ。だからダヤ大陸に住む者にとって“真珠”というものは身近にありながら、それでいてとんでもなく高貴なものなのという印象なのである。

スースティア国民にしてみればなんとメイリア姫にふさわしいことだろう、と一種のお祭り騒ぎであった。

リーチャースの言葉とともに真珠姫の噂は瞬く間に周辺各国の王侯貴族に伝わった。いまではその真珠姫の美貌とはどのようなものなのかと注目のまとである。

またスースティア王国の古い伝統もその注目に拍車をかけていた。

――――“王族の女は十歳から成人するまでは親類以外の人前に無闇やたらと出るものではない”

つまりスースティア王族女性は成人するまで夜会など社交界はもってのほか、公務ですら表にでることは滅多にないのである。

姫君たちは宝石よりも大切に大切に育てられ、可憐でたおやかな花へと成長してゆくのだ。

もちろんメイリアも例に漏れることなくこの伝統通りに育てられた。

そして彼女は成人の儀を終えてからも、いまだ体調や予定が合わずに社交界には顔を出していない。よって彼女の姿を知るのは生誕祭に居合わせたスースティア貴族と、ほんの一握りの各国使節のみなのである。

だからこそ彼女に集まる注目は人並み以上のものがあるのだ。

「さぁ、生地も決め終わりましたことです。これから張り切ってドレスを作って参りましょう。姫様に似合う最高のものを仕立てますゆえ、楽しみになさってくださいませ」
「ええ、期待していますわ。ありがとう」

メイリアは鷹揚にうなずき、ブルーナが退出するのを見送った。

それからふう、と一つため息を吐き出し窓辺にある椅子へ腰掛ける。

いつものように侍女へお茶をお願いして、本をとり、ページをめくる。

メイリアの読書の幅は広い。

同年代の十六、七の女性が好んで読みそうなロマンスものから、文官や書記官が教養を得るために読む哲学ものや、仕事の都合上読まざるを得なくなる政治経済ものまで多岐にわたる。

女だからといって差別される事が彼女は大嫌いなのだ。

そう、知性はもちろん備わっているのだが、その実メイリアは筋金入りの負けず嫌いなのだ。

そんな彼女は食後に高位や低位を問わずに文官や書記官を呼び、政治談義に花を咲かせることが最近の楽しみだった。

お茶の準備を終えた侍女たちが、普段と特筆して変わることがないということを確認すると静かに控えの間に下がって行く。メイリアの読書の時間は、侍女たちの休憩時間でもあるのだ。

ふと時計をみると、まだ珠の刻(たまのこくにかん)二干である。

孤児院からここへ帰って来たのが花の刻なのだからまだ一刻と二干しか経っていないことになる。

今日は随分と読書に時間が取れそうだとメイリアは頬を緩めた。

午後はいつも、公務が終わりさえすればゆっくり穏やかな時間が過ぎてゆく。

だからメイリアは今日もそうなるものだと思い、これからゆっくりと本を楽しもうと心の中で歓喜した。

そして再び、めくった本のページに視線を落とした。

彼女の日常（後書き）

暦、時間、国についてなど、補足説明がありましたら随時各話後書きに記載していきます。

水蜜の月　＝　二月
花の刻　＝　十五時
珠の刻　＝　十六時

一干（かん）　＝　五分

目安、としてのイコールですのでそうなんだ程度にとらえて戴けるとありがたいです。

青空から神解き

時を同じくしてメイリアの父、スースティア国王であるリーチャースは公務を終えて暇を持て余していた。
本来ならば国王の公務というものはこのような花の刻という時間帯に終わる軽いものではなく激務と言う名のふさわしいものであるのだが、昨夜突然体調を崩したリーチャースを心配して側近の文官が内容を軽いものにすり替えたのだ。

「花の刻限か、どうしようかな」

執務室の近くにある部屋では臣下である文官たちは未だ忙しなく働いている。侍女に茶でも入れてもらおうかと思ったが、彼らが仕事をしていることを思うと、リーチャースはなんとなく気が引けた。
ふう、と一寸ため息をついて悩んでみるが良案というものはリーチャースの頭の中には降ってこなかった。

部屋の中をうろうろとした後に、なんとなく窓辺に近づいてみると視界に第三王女のシティアナが侍女などを引き連れて散歩をしているのがリーチャースの視界に入った。
そう言えば最近、めっきり身体を動かしていなかったなと思い「たまには」と自分も散歩にでることに決めたリーチャース。

リーチャースの年は四十代半ばである。
このダヤ大陸には国と呼ばれるものが十と、神区というものがひ

とつある。
その国々にいる所謂元首と呼ばれる人々の中でもその齢というものは比較的若いものであった。

しかし頭の切れる具合というものは年齢に比例はしない。リーチャースも半分棺桶に足を突っ込んでいるような老いぼれには負けないという自信を持っていた。
またそれは単なる自信ではなく、先王が退き彼が即位してからは安定した治世が続き、国庫も問題なく潤沢していた。民は飢えを知らず、笑顔にあふれた。
そんなスースティア王国をリーチャースは誇りに思っていたし、彼自身も良い意味でプライドが高かった。国をまとめる素質があったと言っても良い。

民もそんな彼を賢王として信頼していた。

――――――なにか、来る！
そんな刹那、リーチャースはなにか勘が働いた。
リーチャースはそれが何なのかはよくわからなかったが、なにか胸の辺りからもやもやしたものがせり上がってくる思いがした。
そしてその勘が外れていなかったことを示すようにしばらくすると荒々しく、この執務室の扉が四回鳴らされた。

それはもはや入室を知らせる合図というにはあまりに乱暴すぎた。しかしそのことは、なにか異常事態が起こっているのだということをリーチャースに瞬時に理解させた。
「こ、――国王へ、いかに……申し上げたき、儀、あり！　われ、

は位無き門番。……ど、どうかお許しを」

国王の執務室に入室できるものは限られている。
それは王を守るための措置であり、いくら平和であるスースティアといえどもその点はしっかりと管理されている。
しかし例外というものは存在し、なにか入城の際に異常や危険を察知した場合は、それを応対した門番がその事実を誰にも漏らす事無く走ってここまで来るというものだ。

つまりその門番がここに居るという事は、今現在、通常では考えられない事態が発生しているということを意味していた。

「よい、許す。入れ」

リーチャースのその声が響いたと同時にドアが開く。するとリーチャースの目の前にかなり格好を乱した男が姿を現した。門からここまで死にものぐるいで彼が走って来たことを物語っていた。
苦しそうに片膝をついて、目の前にいる国王に対して礼をする彼に「よい」とだけ言葉をかけたリーチャースの顔は極めて険しい。

よい、と言葉を貰った門番も早くことを話してしまいたいのだろうが、いかんせん呼吸がままならずにしゃべり出す事ができない。しかし無理矢理にしゃべり出した彼の言葉を聞いてリーチャースは自らの顔から血の気が引いていく様子がよくわかった。

――――クラフィティア王国より、王弟殿下リファネーズ様がい

らっしゃっております。

リーチャースは一瞬固まった。

クラフィティア王国とはスースティアの西と国境接する国である。温暖な気候と豊富な資源を上手く利用し、強大な権力と軍隊を保持している大陸一の大国である。

国境を接しているために一応、スースティアとクラフィティアは不可侵条約を結び、表面上は長年の友好国ということになっているが、とりわけ目立って仲が良い国でもない。

そんな国から、王弟という、王位継承権上位の、いわば国の中心人物がやって来たのだ。

その中心人物から前触れなしの訪問となれば、婚姻の申し込みか、はたまた宣戦布告かと相場は決まっている。

いや、しかし確か王弟殿下にはすでに婚約者がいらっしゃったはず。

と、すると――――

リーチャースは一瞬でこの最悪の考えまでたどり着いてみせた。

無理だ。

スースティアにはあのような大国を相手にするだけの兵も、同盟国もいない。

「いかがしましょうか、国王陛下」

いつのまにか門番の後ろにやって来ていた側近のひとりがリーチャースに問うた。どちらにしろ、やらなければならないことはひとつ。

「……謁見の間にお連れするのだ。———ああ、それからリーヒに内密に報せを、そして余のところへ来るようにと」

「仰せのままに」

「御意」

側近とそれからもう一人の声がリーチャースの耳に届いた。その声は緊急時にのみ姿を見せる、影のものの声だった。

神聖なる手紙に

窓から差し込む光、その光を眺めつつ読書をしているのはこのスースティア王国の第二王女、メイリアである。
普段と変わらない、その光景。しかしそれは突然の扉を叩く音によって遮られた。
つづき、声がメイリアの耳へ届く。

「失礼します、メイリア様。陛下がお呼びです。私と一緒にいらしてください」

低い、普段メイリアにとって耳慣れない声。それは明らかに男のものだ。
一瞬、鈴を鳴らそうか――護衛の影を呼ぶ――とも考えたが、彼女は一寸待った。それは扉の前にいるであろうその男の声が、すこしばかり切羽詰まったように聞こえたからであった。

「おまえはだれぞ？　名を名乗れ」

だいたい王族護りの騎士だろうという見当はついていたが、誰かも分からない相手に扉をやすやすとあけるほどメイリアは愚かではなかった。
蝶よ花よ、と大事に育てられただけの姫ならば愚かにも扉を開け放ったかも知れないが、メイリアに限ってそのようなことはない。
たしかにメイリアは大事に育てられた。
しかし、生ぬるいだけのそれだったかと問われれば、メイリアは

きっと否と答えるだろう。
自分の身は自分で護れるように、とメイリアはたくさんのことを学んだのだ。

「ご無礼をお許しくださいませ。私はルサン。貴女様に命を捧げし騎士にございます」

やはり騎士か、とメイリアは本を閉じゆるりと立ち上がる。が、彼女の疑問はまだ解けなかった。
普段、私室にいるメイリアに会うためにはまず少なくとも侍女たちの居る部屋へ行かねばならない。そして彼女らがメイリアに話を伝え、その上で会うかどうかはメイリアが決める。

なのに、扉のそこにいるルサンというものは侍女を通さずに来た。加えて影の者もなにも言ってこないということは、なにか起こっているのか？

「陛下より急ぐよう言われております。どうか、お早く」
「ええ、わかりました」

なにか父様は考えているのだろうか？
私でなければならない、なにか重大なことがあるのだろうか？
部屋を出ると赤髪に細身の騎士が立っており、メイリアをエスコートした。そのまま王族の生活スペースである舞の宮を出ると、今度は国王側近の文官であるリーヒにエスコートをされた。

リーヒに初めてエスコートされたメイリアは少しばかり戸惑った。

メイリアとリーヒはたまに話をするだけだが、そのときいつもリーヒは口数が少ない。寡黙な人だ、と常々メイリアは思っていた。

だが、二十六という若さで何の後ろ盾も無く王の側近という高位まで上る事が出来たのは、ひとえに彼の才によるものだということは、王宮に仕える者ならば誰でも知っていることだろう。

こんこん、とゆっくり間を置いてから二回扉をリーヒは鳴らした。

その扉は先ほど門番の者が急ぎ走った場所――――王の執務室のものであった。

「リーヒ・カイト・シュトレイズでございます」

「おお、待ちわびたぞ。入れ」

リーヒの名を聞いて驚いたのはメイリアであった。

シュトレイズ？　と訝しげにメイリアが眉をひそめると、リーヒは面倒臭そうにため息をはいた。

シュトレイズとはこのスースティア王国の筆頭貴族、シュトレイズ侯爵の氏である。孤児であったリーヒはなんの後ろ盾もなしに王の側近までのし上がった。

これだけでも異例なことだが、おそらくリーチャースは彼を宰相にするためにシュトレイズ侯爵に頼んだのだろう――彼を養子にするようにと。

そして今リーヒが吐いたため息から彼がそれを嫌がり抵抗したのだろうことが容易に想像出来てしまう。メイリアはよかったわね、と小さく呟いた。

そのほんの一瞬後、リーヒは執務室の扉を開け放った。
王からの勅命、としてここへ呼ばれたメイリアは正式な訪問の手順を踏んだ。

まず扉の内へ入らずに、そのまま膝をつき、最上の礼を取る。その姿勢のままに父である国王から声がかけられるのを待った。

「よい、メイリア。早くここへ。クラフィティアの王弟殿下がおいでなのだ」

――え？　クラフィティアの？

メイリアは一瞬驚きのあまり、息をするのを忘れてしまった。
早く、とリーチャースから言われたメイリアだったが、一度正式な手順で始めてしまったものを途中で終わらせる訳にはいかない。よってメイリアは顔を上げ、しかし視線は下げたまま、決して場にいる人の顔を見ないようにリーヒのエスコートを頼った。

そして応接のソファに座る王の横にリーヒは彼女を誘導し、最後に手の甲へ口づけを落としてエスコートは終わりだ。その瞬間、初めてメイリアは視線を上げることができるのだ。

――――思わず息をのんでしまった。

「こんにちは、はじめましてですね？　貴方がお噂のメイリア姫ですか。やはり、真実お美しいですね。そう、真珠姫という二つ名もうなずけます。よくお似合いだ」

そこにいたのは全く美しい銀の長髪を持った青年だった。
少しの乱れもないその銀の髪は、どんな宝石よりも価値を持つと言われてもすんなりと納得できる。またこちらを見つめるすみれ色の瞳は情熱的な光をともし輝いている。
すらりとした体躯と、それを感じさせない穏やかな物腰は有無を言わさずメイリアにその育ちが良い事を感じさせた。
煽られるように視線を交わらせればいとも簡単に捕まってしまう。このような美しい男性に見つめられ、愛をささやかれたならば、大抵の女性は容易く彼に落ちるだろう。

「私の名はリファネーズ・ハイト・レエル＝クラフィティア。役職は王の補佐官……といっても実際は王の弟なんですが。以後お見知りおきを」

リファネーズはにこりと微笑んでメイリアを見つめた。
その視線から目が離せずに、まるで人形のようにメイリアが言葉を無くしているとリーチャースはそれを責めるように小さく咳をした。

ああ！　とメイリアは思い出し、同時に後悔した。

名を名乗るという行為は身分の下の者が先にしなければならないのだ。ましてやいま目の前にいるのはスースティアの国賓、クラフィティア王弟殿下。その礼儀を欠いたのだ。メイリア自身、ひいてはスースティアという国が品位を欠いていると思われたとしても仕方が無い。

完全にメイリアの失敗である。

内心激しく落ち込み、同時に自分を叱責しながらもメイリアはにこりと微笑みを顔に貼付けて名を名乗った。

「わたくしはメイリア・リュース・ミナ＝スースティアにございます。クラフィティア王弟殿下に名を名乗れますこと、至極の喜びですわ。本日は遠路はるばる弊国へお越しくださり、誠に嬉しくございます」

すべての人々を魅了する微笑みとともに、まるで失態など最初からなかったかのように述べた。

「そのようにかしこまらずに。……さて、スースティア国王、本題に入っても？」

優しげな笑みをメイリアに返しながら、リファネーズはリーチャースにそう問うた。その問いにもちろん、と答えたのを確認してリファネーズはメイリアに向き直った。

「実は私はクラフィティア国王である兄のかわりにこちらへやって来たのです。王の公務は倒れるほどの忙しさ。それに王という身であることもあり、王都からそう簡単に離れる訳にはいかないのです」

王の公務は国で一番に過酷だと言われる。常に人に見張られながら、国中から集まる書類に目を通し、日にいくつも会議をこなす。そしてなによりもその両肩には庶民には考えも及ばないほど重い責任がのしかかっている。

そんな王に暇などあるのか？　否、あるわけがない。

「そこで私がかわりに来たのですが、その用事というものは貴女宛なのですよ――メイリア姫」

思いがけない話の運びにメイリアは戸惑いを感じながらも、先を促すような視線をリファネーズに送る。それにリファネーズも頷き、傍から何かを取り出した。

布にくるまれたそれは、封書であった。

豪奢な飾り帯と乾燥花をあしらったそれは、クラフィティア王家紋章印の封蝋で閉じてあった。

「これを預かって来ました。読んでいただけますね？」

メイリアは頷き慎重にそれを受け取った後、それをあけて一枚目のほうから読み出した。綺麗な形の文字で宛名が書いてあった。

――――親愛なる、スースティア第二王女メイリア様へ。

確かに私宛だわ、とメイリアはそれを確認してから。

胸にかすかな、でも確かな胸騒ぎを覚えた。

――メイリア姫、突然の手紙に困惑されたことだろう。お許し願えるだろうか？　そうであってほしい。

おそらく貴女は私を知らないだろうが、私は貴女の事を知ってい

るのだ。ずっと昔、ずっと以前から。

遠く一目見た貴女に私は恋をしてしまったのだ。何度叶わぬ恋かも知れぬと胸を痛めたかわからない。それゆえに諦めようかと考えた事もあったが、やはりできなかったのだ。

これは貴女の意思を無視していることは分かっている。おそらくこれが私の生涯で最大の我侭だろうことも、自分自身理解している。

ただ、それでもどうしても、私は貴女がほしかった――――

メイリアは顔が赤くなる事を覚えた。こんなにも心が熱くなるような言葉を彼女は今までで一度も貰った事は無かったのだ。

情熱的で、一度見たそれだけで、メイリアを好いている、愛していると分かるようなそんな言葉を。

手紙という思いが伝わりづらいものからでも、それがひしひしと伝わってくる。

この手紙は宝物ね、と微笑みながらメイリアは二枚目の手紙に手をかける。

そして目を落とし、目を見開いた。

メイリアの胸騒ぎは現実のものとなったのだ。

「これは誓いの、書？」

その言葉を聞いた瞬間リファネーズの唇が誰に見られる事も無く、軽く弧を描いた。なにか満足そうなそれは一寸すると跡形も無く消

えたが。

誓いの書。

それは教養ある者のみが存在を知り、なおかつ使う事が出来るものなのだ。

婚姻を申し込む際に使う神聖な“契約書”である。

術文字という今ではもう廃れてしまった文字で名前と、そして誓句をある特殊な紙に書き添える。その紙はクラフィティアとスースティアの国境付近にある聖アウシュード山に生えるステムという草を使い作ったものだ。

しかも、その紙もこの誓いを行う者、つまり今回で言えばクラフィティア国王がすべて自分で作らねばならないのだ。

もう数百年も昔に行われていた儀式だが、今ではその風習だけが残っている。

紙に名と誓句を言葉を並べる婚姻の行為は民衆にも親しみがあるが、それに使うのは普通の紙であって、使う紙も現在普及している大陸語の民衆文字である。

もう、専門に知識をつけた者でなければその存在すら知らない、誓いの書。

しかしいま、メイリアが持っているのは――――

「本物――――！」

聖アウシュード山に生えるステムという草で作った紙に、太古の昔より伝わる術文字ですべてを書く。こうして女性に求婚をすると、

その女性以外に求婚は一切できない。
そういう魔法が行使した人に降り掛かるのだ。もはや呪いと言っても良い。

クラフィティア国王は生涯で、私にしか求婚はしないと神にお誓いになられたのだ――――メイリアは驚き、言葉を失い、もはやどうして良いのか分からなかった。

ただ漠然と理解はした。
もはや、この求婚を断る事は出来ないのだと。

「……わかりました」
「申し訳ありません、兄は少々横暴だったようですね。――……ではメイリア姫。改めてお伺いします。我がクラフィティア王国繁栄のためにこの求婚、お受け願えますか？」

誓いの書を使った以上、クラフィティア国王はメイリア以外と本当の意味で結婚が出来ない。側室を娶る事は可能だろう、がしかし誓いの書の魔法は万能に近い。おそらく側室に子は望めないだろう。
仮にいまクラフィティア国王に側室と子が既にいた場合、国に災いが降り掛かるだろうに。実際、過去にそのような例があったことを、実際に誓いの書を書いたクラフィティア王が知らぬ訳がない。

子孫を残せない無能な王を戴く国がどこにあろうか？
災いを招く王を進んで戴く国が一体どこにあろうか？

そんな王を戴いた国民は、その王を引きずり下ろそうと反乱革命を起こすのだ。
そうすればスースティアにも甚大な被害が襲いかかるだろう。あのように広大な国土を保持する大国、崩れたならばどうなるか誰にもわからない。

――――私はこの求婚を断れない！

「ええ。謹んで、お受けいたします」

こうして水歴１２５８年、水蜜の月。
スースティア王国第二王女メイリア・リュース・ミナ＝スースティアの婚約が決まった。

噂、そして価値

突然決まった婚約にメイリアの家族、侍女、さらには国民も嬉しく思ったがしかし、女神のようなスースティアの宝とも言える第二王女の結婚は同時に悲しみも彼らにもたらした。
なにしろ家族であるスースティア王族ですら隣国へ嫁げば簡単に会うことはできないし、メイリアにとっては家族同然である民とはもう“クラフィティア王妃の正式訪問”という形でしか会うことは出来ないのだから。

そんなジレンマに陥りながらも輿入れの準備は慌ただしく、しかし着実に進み、そうしてリファネーズのスースティア訪問から三月（みつき）がすぎた水歴１２５８年、水朱（すいしゅ）の月、二の日。

メイリアはスースティアを発ち、クラフィティアを目指した。

スースティアからクラフィティアまでは早馬でどんなに急いでも四日はかかる。
メイリアのためにクラフィティア王国が用意した馬車では十日前後はかかってしまう。
いくらメイリアの輿入れという長旅のために、と作られた豪奢な馬車だとは言っても所詮は馬車なのだ。

長い時間同じ姿勢、そして一定のリズムを刻む振動。
それは見えない形で着実にメイリアを蝕み、六日目を過ぎた頃、ついに彼女は腰回りを痛め、熱を出してしまった。

クラフィティアに近づくにつれ比較的温暖な気候になるにも関わらず、熱のためメイリアは常に寒気を感じていた。
しかし侍女も慣れぬ土地のために不安がっていることをメイリアは知っていたために、彼女はその体調の異変を誰にも言いはしなかった。余計な気遣いをさせて侍女を疲れさせるなら、自分が我慢した方がよっぽどもましだとメイリアは思っていた。

そしてその苦痛をメイリアは誰にも言わず、常に微笑みを顔に貼付けることによって乗り切ってみせた。

「メイリア姫様、お疲れ様です。あともう少しで王都、メーデンです。もうすこしの辛抱でございます」
「本当？　ありがとう。リューズ、あなたも長旅ご苦労様」
「いえ、とんでもございません」

リューズという御者は長年クラフィティア王家に仕える年老いた御者である。そんな彼はどんなに身体に自信のある貴人であっても、毎日長時間馬車に揺られ続ければ五日ほどで具合が悪くなる事を知っていた。
そうなると日程が変更になり、十日が十五日、十五日が二十日、とどんどんずれ込んで行くことが常であったのに、この年若のスースティア王女はひとつも文句も言わず、この十日間常に笑っていたことに感心していた。
しかも出発のときただ一度名乗った名前をこの王女が覚えていたことにいま、顔には出さないが心底驚いているのである。

しかしそんなことはメイリアの知った事ではない。それがメイリアにとって普通であるのだから。それよりもリューズの発した「も

うすこし」という言葉がどれだけメイリアを救った事か。
疲れを忘れるほどにメイリアはうれしかった。

とても楽しみだわ、とメイリアは知らずここ数日で一番輝いた笑みを見せた。
（これから私の民になる人々がたくさん住んでいる都、メーデン。ああ、はやくみてみたいわ！）

しばらくすると御者からもう一度声がかかった。
それを聞くには、もう王宮への道を走っていて既に王城下へ入っているのだそうだ。

そう言われれば馬車の揺れが少なくなったかも知れないわ、とメイリアは急に実感にわいた。――自覚をすれば他の事にも気づきやすくなるもので、なにやら馬車の外がすこし騒がしい気がする。
人の声のようだけど、とメイリアは確かめたくなって馬車の窓につくカーテンをひいて外を見た。

するとそこには人、人、人！
みんな馬車を覗くように見ていて、中のメイリアと目が合うと皆一様にはじけんばかりの笑顔を見せた。

「彼らは未来の王妃様のお顔を見ようと道に集まっているのですよ。ぜひ手を振って差し上げてください。皆、メイリア姫様の民であり、家族になるのです」

御者台からこちらに聞こえるようにリューズが発したその声を聞いてメイリアは震えた。

（私の顔を見ようと待っていてくださった方たち、微笑んでくださる方たち。みんなみんな、私の民、そして家族、愛すべき人だわ）

メイリアは窓越しではあるが左右に居る民衆に出来るだけ多く微笑みかけ、手を振った。御者のリューズもメイリアの気持ちを汲み、ゆっくりと馬車を走らせてやった。

名残は惜しいが馬車は王城の門の前で止まり、リューズが門番のものに手続きをとってくれている。少し時間がかかるかもしれません、と言われたメイリアは迷う事無く馬車の外に出た。

ちょうど三月ほど前に、祖国スースティアで仕立てたドレスが風になびいた。薄紅の質素だけれど、上質なドレスがメイリアによく似合っている。

馬車の横に立って、門より伸びる長い道を見据える。

――ここが私の街、民衆の根付く場所。

馬車の少し後ろには馬車を追って来たのか数多の人々がいた。どうやら近づける範囲があるらしく一定のところから近づいては来ないのだが、そんなことはメイリアには関係なかった。

「私はスースティア王女、メイリア。迎えてくれたこと、感謝いたします」

メイリアは膝をおり、腰を屈め、出来るだけ優雅に礼をした。

そこにいる人々に伝わったかどうかは定かではないが、それは礼の中でも最上級のもの。本来ならば国王へ向けるそれであったのだ。

――――黒髪の、心優しい姫君。

――黒真珠の姫君。

この瞬間メイリアの噂は塗り替えられた。

――スースティアに神が与えた美貌の姫君がいる。

それが大陸全土の貴族の噂だ。

その美貌に詩人たちはこぞって詩を読みたがり、男性は酔いしれ、女性は嫉妬した。

しかしそれは民衆には伝わってはいなかった。

だが、今日のこのメイリアのしたこと。

――クラフィティアの未来の王妃、彼女は民衆に腰を折った、真に美しく心優しく方だ。

メーデンは大陸で商業の要所だ。商人たちの言葉をもってそれは各国の蒼生（そうせい）へ瞬く間に伝わって行くだろう。

しかしメイリアは知らない。自分が一体どれだけのことをしたのか、ということを。きっと彼女は一生そんなことに興味は抱かない。

噂、そして価値（後書き）

水朱の月　＝　五月

白く語る、彼に（前書き）

１５Ｒ指定の表現が多少あります。
苦手な方はこの話を読まないようにしてください。

白く語る、彼に

「ああ、メイリア姫！　お久しぶりですね」

王宮へ入るとまずメイリアはクラフィティアの女官たちに迎えられた。彼女らの仕事はひたすらメイリアを気にかけることなので、それはもう「お疲れでしょう」「お体の具合は」「どうぞなんでもお申し付けくださいませ」等々、目が白黒するような洗礼を受けた。

そこでメイリアが他より位の高そうな女官に聞けば「現在、国王陛下、ならびにリファネーズ殿下は会議の真っ最中。いま言伝をもった文官がリファネーズ殿下に知らせに行きました故、もうしばらくお待ちくださいませ」と返された。

しかしこの異常な出迎えの女官の多さ。

そしてその皆で囲んでメイリアを気にするのだから、もうメイリアは参ってしまっていた。

そこへ救世主のように現れたのが、王弟リファネーズだ。

本当に久しぶりだとメイリアも感じたが、なにしろまわりの女官の多さに戸惑ってしまい苦笑いを浮かべる他なかった。

するとああ、といってリファネーズはひとりの女官に指示を出した。

「キリル、全員下がらせてかまわないよ。メイリア姫は僕が案内しよう。あとで必要になったらキリルを呼ぶから」

リファネーズがキリルと呼んだのは年配の女官だった。それを聞いて彼女はかしこまりましたと一言述べた後に、大勢集まった女官たちにそれぞれ指示を与え散らせた。

そのあとでそのキリルという女官はメイリアに向き直り、丁寧な挨拶を述べた。

「私は女官長を務めます、キリルといいます。本日はお疲れな上にこのような失態をお見せしてしまい申し訳ありません」

「いいえ、いいのです。恐らくあなたに非は無いのでしょう」

くすくすとメイリアが笑うと、女官長のキリルは目を見開いたあとに少しだけ微笑んだ。

メイリアの察した通り、女官長が最初に呼んだ女官はたったの二人だけだったのだ。しかし女の噂好きはどこへ行っても変わらないもの。少し覗くだけ、といってあちらこちらから噂を聞きつけた女官が集まってしまったのだろう。

「メイリア姫、来て早々に驚かせてしまって申し訳ないです」

「ふふ、本当に。もう少し早く王弟殿下がいらっしゃってくだされば良かったのに」

なにげなくした会話のその中で、リファネーズのことをメイリアが“王弟殿下”と呼ぶと、リファネーズはそのすみれ色の瞳を驚い

たように見開いて、苦笑した。

「仮にも義姉上(あねうえ)となる方から“王弟殿下”などと仰々しく呼ばれるとは思いませんでしたよ。そのようにかしこまらずに、リーファとでも呼んでください」

「まぁ。では……リファネーズ様と呼ばせていただきます」

「いずれ家族になるのですから、どうぞ肩の力を抜いてくださいね……っと、では兄のところへ急ぎましょう」

「ええ、お願いします」

(とても心が綺麗な方。まるで大きな少年のようね)

メイリアはにこりと笑ってリファネーズの後について行った。

それから随分と歩いた気がする、そしてかなり王城の奥の方まで来た気がする、となんとなく感覚でメイリアは感じていた。

しかしと同時に大きな不信感もいだいていた。何しろ結構な距離を歩いたというのに、まったく人に会わない。王宮に仕える人に一人くらい会ったって、何の不思議も無いのに。

そう、メイリアは知らない。リファネーズがわざと人の通らない、または通れないような通路を通ってメイリアを案内していることなんて。

ふと、リファネーズが一つの扉の前で立ち止まる。

こんこん、とノックをした彼の顔には悪戯に成功した時の悪い笑

みがあった。

「兄さん？　メイリア姫をお連れしたよ。入っても良い？」
「ああ、」

（この中に、私の夫となる方が――クラフィティア国王がいらっしゃる）

メイリアはその名だけは知っていた。
彼が数年前に即位した時それは話題になったのだ。勇猛な、それでいて輝かんばかりの王が生まれたと。
メイリアは知らず期待に胸を膨らませる。自然に頬が緩み、笑顔になる。

（優しい方かしら。そうだといいわ。――――いいえ、そうに違いないわ）

金属のこすれる音がして目の前の扉が開いた。
メイリアの緊張は最高潮に達し、胸の高鳴りもどんどん加速して行く。
そして、次の瞬間、空気を伝った声がメイリアの耳に届いた。

「メイリア姫、か？」
「は、はい」

メイリアは声が震えた。
なぜならメイリアはスースティアからやって来たのだ。この目の前にいる男のためだけに！

薄緑色の瞳、すこし伏し目がちになっているその様はなんと妖美なことか。
流れるように切りそろえられた少し長めの髪は、神々しいばかりの金色。
ただ名前を呼んだだけなのに、メイリアの心臓を早鐘のようにしてしまう低く甘い声。

どこに居ても目を引くその容姿、姿のなんと美しいことか。メイリアは感嘆していた。

――――初めてリファネーズ様にお会いしたときも言葉をなくすほど驚いたけれど……。ああ、そうなのね。この方と、リファネーズ様は一対（いっつい）の象徴なのだわ。
この方は太陽、リファネーズ様は月。昼であろうと夜であろうと、絶えず国を照らす太陽と月。ああ、この国はなんと幸運なことか。太陽と月の愛し子に護られているのだから――――

メイリアは人の見目などを気にする器ではなかった。
どんな姿形、どんな心根をしていようと彼女の広い心はすべてを包み込んでしまうのだから、そのような小さなことは彼女の気にすることではなかったのだ。
だが、しかし――――

「メイリア・リュース・ミナ＝スースティアにございます。クラフィティア国王陛下にお会いでき、光栄でございます」

メイリアは震えながら礼をとる。
それを見てクラフィティア王は愛しそうに目を細めた。

「あまりかしこまるな。それに俺のことは名前で呼べ。敬称もいらない。俺たちは夫婦になるのだから」
「そ、そのような――――」

そのような横暴な振る舞いはできません――――、メイリアは初めて感じた心の底からの震えと異国での緊張でパニックに陥っていた。
それに、そのことがなくとも夫になるとはいえ他国の王を出会ったその場で馴れ馴れしく呼び捨てにすることなど、たとえ許可があったとしてもメイリアには憚られた。

「なんだ？　俺の名がわからないのか？　アルフィーネ・リンクス・ケラ＝クラフィティアだ。アルフと呼んでくれ」

アルフィーネの薄緑色の瞳がいとおしそうにメイリアをのぞく。その瞳になんの害意も潜んでいないということに、いま改めてメイリアは気づく。
メイリアは自分自身驚いていた。この異国の地にたったひとりで来た、そのことが知らず自分を緊張の糸で雁字搦(がんじがら)めにしていたということに、たったいま気づいた。その事実に。

それに気づいたメイリアはふっと自分の方の力を緩めることが出来た。
目の前の瞳がメイリアに教えてくれたことだった。
“だれもメイリアを傷つけようとはしていない”――その当たり前のようなことに気づかせてくれたこの、薄緑色の瞳。
（やっぱい、子供のような瞳、リファネーズ様と同じ、かわいらしい瞳ね）

「では、……アルフと、呼ばせていただきます」

ふふ、とメイリアは思わず頬が緩み、赤く染まった。

首を傾げ、頭一つ分以上背の高いアルフィーネをメイリアはそのまま見つめた。

互いの視線が絡み付く、離れない。

力強いその視線、とてもメイリアにそらすことは出来ない――――

「メイリア、好きだ」

メイリアが気づいたとき、メイリアはすでにアルフィーネの腕の中に居た。

耳元で熱のこもった息を言葉と一緒に感じる――“メイリア、好きだ”と。

決して強い力ではないその抱擁、緩い力で髪を撫でられながら感じる吐息にメイリアは心の底が震えるのを感じた。

「好きで好きで、たまらない」

メイリアはこめかみに落とされた柔らかい口づけに嬉しくなり、同時にくすぐったくなって身を捩り目を細めて笑った瞬間に、体が熱くなった。

「――んっ」

一瞬、その瞬間だけ触れ合う、そしてこれ以上無いくらい近くで見つめ合う。

啄む、なにかを伝えようとするキスをアルフィーネはメイリアの

額、頬、まぶた、いろんなところに落とした。

――――愛しくてたまらない、と言葉でなくキスで伝えるために。

そして耳たぶを甘く舐められ、食まれる。その甘えるような仕草にメイリアは瞳を閉じた。そして次の瞬間、唇に落ちてくるその熱。

メイリアがすこし苦しくなって、唇が離れた瞬間にすこし口を開くと、遠慮がちにメイリアを伺いながらアルフィーネが舌を差し込んだ。

柔らかく、内側を溶かすように、与えられ、吸い取られ、惑わし惑わされ。

「ん、――んふ」

鼻から抜けるような声が漏れて恥ずかしくなりメイリアが少し顔をうつむけると、それをとがめるように強く甘くアルフィーネが唇を吸う。そのまま離れようとする唇が、やっぱりすこし寂しくて、――――やめてほしくない、そんな気持ちを伝えるようにメイリアは思わず呟いた。

「アルフ――――」

赤く色づいた頬、熱のこもった吐息、同時に愛しい人からこぼれる自分の名前――――それを嬉しく思わない者が一体どこに居ようか。

アルフィーネはこつり、とメイリアの額に自分のそれを合わせこれ以上無いくらい愛しいという気持ちを伝えようとする。

ほんのり涙を浮かべたメイリアの深緑色の瞳と薄緑色のアルフィ

ーネの瞳が、絡まる。これ以上見ていたらどうにかなってしまいそうで、ぎゅっと今度は力を入れて抱擁する。
そしてちょうどアルフィーネの口元にふれる耳を、丁寧に彼は舐めた。
自分の舌が彼女の耳の内をくすぐる、その度にメイリアの肩が震え、それに心内でアルフィーネはどれほど歓喜したことか。
薄く漏れる声を我慢するためなのか、自分の服を小さく握りしめるその手さえ愛らしくて仕方が無い。

一方メイリアは耳に直接響く、水に濡れた音に自分の体が浸食されていくのを感じていた。何かが背中を這い上がってくる、それに耐えようとしているのに不思議と足に力が入らずすべてをアルフィーネに預ける格好になってしまう。

独占欲、というのだろうか。
その姿に満足したアルフィーネは、メイリアの名を口にした――

――

「メイリ――……」
「アルフィーネ様！　こちらにいらっしゃいますか！？」

メイリアの名を呼ぼうとしたアルフィーネの声を遮ったのは、慌て急いだような部屋の外から聞こえる声。よくよく注意して聞けば、ばたばたと複数の足音も聞こえる。
何事なのかとメイリアがアルフィーネを見れば、彼は面白くなさ

そうな顔を扉に向かってみせていた。

そして事情をアルフィーネから聞き出すまでもなく、扉の外の通路を走り回る声が事の次第を説明してくれた。

「アルフィーネ様、大臣方が血眼になって探しておいでですよ！会議にお戻りくださいませ！」

その声を聞いたアルフィーネは小さく悔しそうに舌打ちをし、“リーファの時間稼ぎもここまでか”とつぶやいた。

メイリアはアルフィーネの言葉を聞いて、自分を部屋につれて来たはずのリファネーズの姿がどこにもないことにようやく気づく。そして今見聞きしたことをすべてつなげると、メイリアの頭の中ですべてが一直線上に繋がった。

「アルフ？　もしかしてここに居てはいけないのでなくて？」
「どうせ俺がいなくても成り立つ会議だ。リーファがどうにかしてくれるだろう」

アルフィーネのその言葉を聞いた瞬間、メイリアはため息を吐いた。

つづき、一瞬目をつむり、その直後大きく声を張り上げた。

「そこの者、国王陛下はここにおられる。入ってこられよ！」

メイリアのその声を聞いたのか、特に鍵のかかっていなかった部屋の扉を勢い良く開けて人が二、三人なだれ込んできた。その入って来た人たちは随分と息を切らしていて、結構な時間アルフィーネを探していたのだろうことが伺える。

一方アルフィーネはメイリアの取ったこの行動に心底驚いているようで、声も上げなかった。否、上げることができなかった。

「アルフィーネ様。王は民あってのもの。常に民衆のことを第一に考え、行動せねばなりませぬ。貴方様の両肩にはその地位に匹敵するだけの重責がのしかかっていますが、反対にその責任を負っているだけの権力（ちから）もあります。王権をもってして出来ぬことなど無きに等しいではありませんか。よくよく考え、どうぞその民の上に成り立つ権力（ちから）を、民草の為にお使いくださいませ」

部屋に入って来た者、アルフィーネ。

双方がメイリアの言葉にぽかんとする中、それでも彼女は動じない。

「アルフィーネ様、私は愚者の妻になる気は毛頭ございませぬ。どうか、それをよく肝に銘じてくださいな。――――さ、そこの者、陛下を連れて行きなさい」

「は、はいっ！　姫君、ご協力感謝いたします」

メイリアはその言葉に微笑みとともに頷いた。アルフィーネはまだなにも言葉を発しない。

（真珠姫――、ただの深窓の佳人かと思っていたが……どうやら俺は勘違いをしていたらしい）

アルフィーネは満足げに口の端を上げた。

――――これから、楽しみだ。

口には出さなかったが彼がそう思っていることは、なによりも明らかだった。

逆鱗と遊戯

――――さて、どうしたものかしら。

アルフィーネが臣下に引きずられ会議に戻って行ってから数分、メイリアは困っていた。なぜかといえばこの今居る部屋へリファネーズによって連れてこられたメイリアは、実はここが一体どこなのかということを知らない。このクラフィティアの王宮――ゴースィア宮殿の中のことをメイリアが知っているはずもない。

かといってこの場にとどまるのも気が引けた。
ここはメイリアの感覚からすればさほど広くも豪奢でもない、ふつうの部屋。おそらくなにか個人的な部屋なのだろうことが、質素で統一された調度品から容易にメイリアは想像できた。
ここにとどまってもなにもメイリアには利点がないし、なにより彼女は自分の内に好奇心がくすぶっていることを知っていた。

さて、おとなしく誰かがくるのを待つか。
それとも自分の欲求に忠実に行動してみるか。

一寸ほども考えること無く、メイリアは後者を選んだ。

（いずれこの宮殿の中を分かるようになれねばならないのだから、いまお散歩しても特に問題はないわよね？）

メイリアは自分にそう言い聞かせて部屋から足取りも軽く出て行

った。

しかし幸いというべきなのか、そうではないのか。

先ほど居た部屋から出てもほとんど人には会わない。加えてメイリアは上質なものとはいえ、極めて質素な飾り気の少ないドレスをまとっているため、たまに使用人と廊下で擦れ違っても誰も気づかない。

そもそも一体だれが、侍女も連れていない、廊下で擦れ違えば微笑みとともに会釈をする彼女を自国の次期王妃だとおもうだろうか？

擦れ違う人々は彼女を“新しく侍女に上がった貴族の娘だろうか？”ぐらいにしか思わない。良くて遠方領地の貴族令嬢か、と言った認識だった。

それゆえに誰にも引き止められることも無くメイリアは王宮を歩き回り、しばらくするとある庭にたどりついた。

「まぁ、噴水だわ」

そこにはさほど大きくない白い石で作られた円形の噴水があり、その中央には人魚の彫刻が配置されていた。人魚がなにかを求めるように天へ手を伸ばしその先から水が落ちる、といったその意匠。メイリアにはそれがとても美しく感じられた。

噴水、といってメイリアが思い出すのは幼少のころの記憶である。まだスースティア王族の伝統――王族の女は十歳から成人するまでは親類以外の人前に無闇やたらと出るものではない――に縛られる前、かなり曖昧だが誰か男の子と一緒に遊んだような記憶があるのだ。

それが脳裏に思い出され、メイリアは嬉しくなり、手袋を外した

指先を噴水の水へ浸けそして勢い良く水を上に跳ね上げた。
ちょうどその水しぶきは太陽の光に輝いて、きらきらと光る。メイリアはその光のやわらかさに心がいやされる感覚を覚えた。

「綺麗、ね」

人形の意匠の噴水、まわりには緑があり、ささやかな花。上をむけば太陽の光がさしこみ、噴水の水はそれを反射して薄く顔を照らす。

（とても素敵な場所だわ。落ち着いたらきっとここでお茶会をひらきましょう）

そう心に留めてメイリアはこの場を後にした。

――しばらく歩き、庭師の老人と仲良くなり、気分を良くしたメイリアはまた違った雰囲気を放つ一角に足を踏み入れた。と、同時に聞こえてくる声。
かなり気合いの入ったそれ、そして鉄同士がぶつかる音。メイリアにとって聞き覚えのあるその音に誘われて、どんどん足を進める。

（まぁ、……これは近衛兵かしら？　騎士団？　それとも――）

「はぁっ！」
「やああーっ！」

いまメイリアの目の前には、刃のつぶされた剣で力を競い合う男たちがいた。
どうやら一対一、試合形式の訓練のようでその試合を取り囲むように他の男たちはそれを観戦していた。どうやら腕試しのようだ。

鉄が響き共鳴する音がメイリアの耳に幾度と無く聞こえる。その音は鈍く、受ける印象はただ力がぶつかり合っているだけ、というものだ。
一度興味を持ってしまうと気になってしまう質のメイリアは、その中に入ろうと辺りを見回した。

（見学くらい、良いでしょう？）

――さてどうやって中に入れてもらおうかしら、とメイリアが思案しているとちょうどよく前方から若く少々小柄な男がやって来た。
試合のまわりに集まっている男たちと同じ格好をしているため、彼もその一員であることは想像がつく。取りなしてもらおうとメイリアは彼に声をかけた。

「ちょっとすみません、そこの方」
「はい！　――って……え？」

ほとんど条件反射のように返事をしたその男は、声をかけて来た人物を視認した途端に素っ頓狂な声を上げた。そして多少メイリアを訝しむような視線を投げた後に、急にうさんくさそうな微笑みを見せた。

おそらくメイリアをどこかの貴族と判断したのだろうが、しかし

メイリアは彼のその笑みに違和感を覚えざるを得なかった。

「ご令嬢、どういったご用件でしょうか？」

「この練習場の中をぜひ、見学したいのだけれど……よろしくて？」

「中を、……ですか？　では――そうですね、許可を取って参ります。少々おまちください」

「ありがとうございます」

メイリアの用件を聞いて彼は盛大に怪訝な顔をしたけれど、それもほんの一瞬で、それ以外は全くこちらにそんな風を見せないですばやく身を翻して建物の中へ入って行った。

余談だが、お礼とともにメイリアがにこりと笑ったために、彼の頬が赤く染まっていたことをメイリアは知らない。

近くにある花を見ているとすぐに彼は戻って来た。

「隊長に確認して参りました。特別に許可するとのことです、では、ご案内いたします」

鷹揚にメイリアは頷き、その小柄な男の後をついて行った。

しかし、とメイリアは思う。

（なんて綺麗な髪の色なんでしょう。青灰色、とでもいうのかしら？）

メイリアの目の前に居る少し小柄な男の髪は青灰色で、瞳は空の様に抜けた蒼色だった。きれい、だとメイリアは思ったがそれ以上にある伝説の様な実話、いまではもう昔話になっている話が頭をよぎった。

――昔、このダヤ大陸には魔物が居たという。
人々は魔物と戦い、大陸全土にいたその人外のものをいまクラフィティアがある土地の海岸線まで追いつめた。しかしこのフィティアという勇者はもう魔物と戦う力が残っていなかったのだ。
そこへ、突然現れたのが現在では英雄として語られるスティーリアという女性だ。聖なる力と類い稀なる剣術で、勇者フィティアの力となり、遂に魔物の殲滅をなしえ、人々に平穏をもたらした。

『フィティア、私は貴方に生涯の忠誠を誓いましょう。貴方の作った平穏を護るために――』

フィティア（クラフィティア）の平穏は、始祖王と英雄によってつくられた――

これは学びのある者には極めて有名な話である。なにしろ伝説のような実話であるのだから、研究のしがいがあるというものである。
そして、そのスティーリアの髪の色が、実は青灰だったということもかなり有名な話なのである。

（もしかして、彼はスティーリアの末裔なのかしら）

メイリアは目の前に居る彼の血に流れているかも知れない、英雄に思いを馳せた。

「ああ、あなたですか？　このような練習場を見学なさりたいとか

いう変わりったご令嬢は」

しかしそんなメイリアの思いも、目の前にいる年配の騎士のせいで台無しになった。にやにや、と顔を緩ませながらメイリアを上から下へと見回すその視線。あまりにも不躾なその視線に、メイリアは思わず顔をしかめてしまった。

「ええ、ぜひ見させていただきたくて」
「そうですか。でしたらそこへおかけになってなってご覧になってください。くれぐれも危険ですので……――――」
「わかっています」

長たらしい説明に入ろうとした年配の騎士を煩わしく感じ、わざと彼の言葉をメイリアは途中で遮った。
どうもこの男の言葉の下には男女差別の感情がちらちらと見えて、それがメイリアを猛烈に苛々させる。男女差別、という概念が存在すること自体メイリアには我慢ならないことなのだが、さらにそれを振りかざそうとする輩には我を忘れるほど怒りが込み上げてくるのだ。

しかし、ここは我慢だとメイリアはそれ以降、椅子に座りおとなしくしていた。

一組目、二組目、と試合形式で進んで行くその練習をみてメイリアはどんどんと原因不明の苛々と、後悔に苛まれていた。
――――ああ、なぜこの練習場にはいってしまったのかしら。

力ばかりにまかせて振り下ろされる剣、そして隙だらけの動き。
下ろされた剣を受け止める側も、筋力に任せるだけ。メイリアの目から見ればそれは受け流した方がはるかに効率的に思えるような、それでも。

見る組、見る組、敵に殺してくださいとでも言っているのかと思うような、隙の多い騎士たちにメイリアは知らずにため息をはいた。

加えて、自分の試合が終われば周りで雑談、笑いが飛び交う始末。本当に鍛錬して強くなる気があるのかしら？　とメイリアは疑いたくなってしまう。

そしてメイリアがこの試合を見始めてからちょうど七組目、ついに彼女の我慢は限界を超えてしまった。

「ちょっと申し訳ないけれど、そこの貴方？　私に刃を潰した剣をもって来て頂戴」
「ええ？　無理ですよ、貴女のようなご令嬢に剣を振ることなど」
声をかけたメイリアの近くにいた男はへらへらとメイリアに言い返した。

「……それは私が女だから、という理由かしら？」
「も、もちろん。貴女はだって、貴族のご令嬢でしょうに」

――それは、メイリアを前にして言ってはいけない言葉だった。

所謂、禁句というやつだ。自分の優位さをひけらかし、他人をおとしめる類いの言葉。
それは簡単にメイリアの逆鱗に触れた。
（さっきから一体なんだというの？　そんなに女が軽視される謂れなどないはずよ。大した剣の振り方もできない下衆が、男だからと威張り腐って！）
それだけじゃない。
男女差別、それだけじゃない。
親がいないから、血が穢れているから、肌の色、目の色。何が偉くて、何が偉くない。何が優位で、何が優位でないなんて、簡単に決められるものでないのに。だれが決めて良いものでもないのに。
だからメイリアは許せない。
そうやって人に上下をつける、その考えが。

「お黙り」
メイリアは我をも忘れ、殺気さえ感じさせる声で視線で、場にいる男たちを圧倒する。
「はやく私に剣を持って来て頂戴」
いままで言葉の端々から甘いような、優しいような雰囲気の溢れていたメイリアの言葉から完全にそれが消えた。彼女の口から出る言葉に、宿ったのは怒気。憤怒、そして冷気。
普段はどんなことがあってもメイリアから出てくることの無いその気配に、メイリアと面識のない、ここに居る愚鈍な騎士でさえ気

づき、震え上がった。

そしてメイリアの元に一本の剣がすぐさま持ってこられた。

「有難う。――で？　この中で一番お強いのはどなたかしら？　自信がお有りになる方でもよろしくてよ？　私が打ちのめしてくれるわ」

メイリアが怒気を含ませて述べると、周りの騎士たちは緊張した。メイリアの小鳥が鳴くような、でもよく通るその声が耳に入っただけで彼らの背中に嫌なものが走ったのだ。

（おい、一番強いのって、だれだ？）
（ここは隊長が相手をするべきじゃないのか？）
（あ、でも、あいつが居たじゃないか。あいつ、ほら……）

ほら、と口にした騎士の横を通り過ぎるグレーの髪をもった長身の、男。胸には数個の勲章があり、それを彼が誇りに思っているのだということはすぐに見て取れた。

「俺がお相手いたしましょう、ご令嬢」

メイリアの怒気に臆すること無く、むしろ挑戦的に出て来た彼。勇気があると褒めればいいのか、鈍感だと貶せばいいのか。しかし自ら名乗り出たことは賞賛に値する、とメイリアは相手をよく観察した。

お情けでぶら下げられているような三つの勲章。決して大きくな

いそれは、他の騎士にはついてすらいない。

（ということはそれなりの手練？　いえ、でもあの大きさ――貴族の子息なら簡単に手に入る、形だけの勲章なんて吐いて捨てるほどあるでしょうに）

「なにかの隊の、長かしら？　そのくらいの勲章のように見受けるけれど」

「ええ、そのとおりですよ」

にやにやとブルーの瞳をおもしろそうに細めて、メイリアを笑う。明らかに馬鹿にしているようなそれに、メイリアはため息を吐くと同時に多少のいらだちも覚える。メイリアにはこの男の言外に含まれる嘲りを敏感に感じ取っていた。

（完全に見くびられているわ）

「あなた、名は？」

「シティルだ。そちらさんは？」

名乗りたくは無かったのだが、相手の名を聞いてしまった手前名乗らざるをえない。しかし本当の名を名乗ってやる義理もない。よって、メイリアは偽名を名乗ることにした。

「シアナ・スーティアよ。よろしくお願いするわ」

少々の思案のあと、メイリアが名乗ったその名前はスースティアにいる愛しい妹のシティアナが城下でお忍びのときに使う名前であ

った。

そのメイリアの攻撃的なまなざしを受けてシティルは一瞬驚いたように瞳を見開き、次いで心底面白そうに唇をゆがめた。それは馬鹿にしたものでなく、ただ単に珍しいものを見たときの。

そのとき内心シティルはメイリアのことを見誤ったかもしれない、と少々後悔していた。

なぜならそれまでシティルのまわりにいた女はいつだって、彼に媚び、甘えてきたからだ。騎士小隊長という彼の肩書きと、彼の生家であるスティコットという貴族の家柄に引かれて、いくらでも彼のまわりには女が、しかも腐った女がすり寄っていたからだった。

だから彼は多少誤解していた――――自分は女の扱いは心得ているし、不自由もしていない。むしろ女ってものは鬱陶しい生き物だ――――と。

その腐った女の括りの中に最初、彼はメイリアも含めていたのだ。

そのメイリアを見る目に侮蔑が含まれていたのも当然と言える。

「シティル、私と勝負なさい。私が勝ったら、私の望みをあなたにひとつ聞いてもらいますから。――――存分に後悔させてあげるわ」

「じゃあ、俺が勝ったらシアナ嬢が俺の望みを聞いてくださるんですね？」

「もちろん」

そのとき二人はほぼ同時に同じことを思った。

――私が負けるはず無いのに、馬鹿な男。
――俺が女に負けるはず無いのに、馬鹿だな。

「おい、セオ！　こっち来い」
「え、俺？」

シティルが突然呼び寄せたのは、一番最初にメイリアが呼び止めた小柄な彼だった。随分と驚いた様子だったが、呼ばれた彼は素直にそばに来る。

「貴方、お名前は？」
「あ、セオリオといいます」

ぺこり、とお辞儀をして苦笑と共に「僕はシティルとは兄弟なんです」とメイリアに説明をする。
それを受けてメイリアはよく二人を見比べると、なるほど何となく顔が似ているかもしれない、と納得した。

積極的、そして野心家な一面を秘めていそうなシティル。
対して一歩引き気味、そして礼儀正しいという雰囲気のセオリオ。

纏う空気こそ正反対のように感じるけれど、兄弟だと言われれば自然と納得する。

「セオ、審判よろしくな」
「――――わかったよ」

シティルの我侭ぶりには慣れているのか、仕方なくなくと言った雰囲気でセオリオはその役目を引き受けた。もちろんメイリアも異存はない。彼がその役目をするならきっと公平に物事が進むだろうことが容易に予測できたからだ。

そしてセオリオは簡単にルールを二人に説明した。
それを簡単にまとめるなら、相手にけがをさせないこと、一本とったらその時点で終了、ということ。つまり寸止めを基本とする。

「では両者構えて、――――はじめ！」

がつん、と鉄がぶつかり合う鈍い音があたりに響き渡る。時折はじき返されたような鋭い音もそれに混ざる。
それが休むこと無く続く、それの意味するところは二人が休むこと無く剣をぶつけ合っているということ。

その音が鳴り響けば響くほど、対照的に場内の空気はしんと静まり返って行く。だれもが固唾をのんでメイリアとシティルの二人を見ていた。

――――メイリアには勝算があった。
否、勝算という言葉では程度がぬるい。正確に表すならば負けるはずがないという自信、がふさわしいだろう。

真実、メイリアがただの慈悲深い、大切に育てられただけの姫君だったならば、完全にこの勝負はメイリアが負けるであろう。いやその前にこのような勝負をする状況すら成立していなかったに違いない。

しかしメイリアは勝負を持ちかけたし、その時点で勝つという自信があった。自分が負けるはずが無い、という確たる自信が。

はじめはそのように思っていたのはメイリアだけだっただろう。だれが想像しよう？　見るからにか弱そうなメイリアに騎士であるスティルに負けることなど。

けれど、いま、どちらが勝つかと周りに居る騎士たちに聞けばその答えは変わって来ているに違いない。

それほど明確なものとなって、メイリアとシティルの差は人々の前に体現された。

「あらシティル、もうお終い？」

――最初に地面に両膝をついたのはシティルだった。

肩を激しく上下させ、息を大きく乱し、額から汗が噴出している。身体はもう疲れをみせていた、がしかしその視線だけは未だメイリアを睨みつけていた。

対するメイリアは息も乱れず、嫌味さえ余裕を持って言うことが出来る。

シティルはその嫌味に眉をひそめることこそすれ、言い返すことはできなかった。

シティルは悔しくて、自分がふがいなくて仕方なかった。

はじめ、剣を交わした瞬間、彼は余裕だと思っていたのだ。

渾身の一撃、それを受ける彼女の剣は全く力が入っておらず、受け止めきれていないなと彼に思わせたからだ。しかし次の切り返し、

メイリアの剣を押す力は先ほどシティルが感じたものより遥かに強くなっていた。

まさか、とシティルは思った。

しかしその嫌な予感のようなものを払拭しようと、続けて切り込めば切り込むほど、その背筋を這い上がってくる寒気はどんどん冷気を増していった。

シティルが振り下ろした剣をメイリアは受け止めない。すべて流して無効化してしまう。そして受け流された次の瞬間に、シティルに出来た隙を狙って容赦なく彼女は剣を突っ込んで行く。

その間合いを取る上手さ、隙を見つける巧みさ、そしてなにより、その半端でない洞察力。

もはやメイリアがただの令嬢でないことは、当事者のシティルだけでなく、この場にいる誰の目にも明らかなことだった。

「さ、かかってきなさい」

さらにシティルを苛つかせることには、彼女が剣を振るう瞬間、いつも微笑みをその顔にたたえているということだ。その微笑みに隠された言葉が、それを向けられているが故にシティルには手に取るように分かってしまうのだ。

「……んの、やろっ」

再びメイリアに向かうシティルのその姿を見て、まわりの騎士たちが何も感じないはずはない。

はじめこそ、どちらが勝つか賭けようなどと馬鹿げたことを話していたが、シティルが地面に膝をついた今、そんな賭けは無用の長物だと誰もが感じていた。なぜなら賭ける対象が同じなら、それはもはや賭けではないからである。

シティルの声だけが響き、再び剣と剣が交わる。その音がこの場に響く。

だれもが、理解していた。無理矢理、理解させられていた。

――――二人の力の差が、歴然としていることを。

一方メイリアはシティルが膝をついたことに気分を良くし、上機嫌だった。

（ひとを小馬鹿にするから、そんな目に遭うのよ）

そしてメイリアは剣を握る手に一層力をいれて、この試合の決着を付けるために新たに一歩を踏み出した。

疲労困憊のシティルにさえメイリアは一寸の遠慮なく、次々と切り込んで行く。そこには慈悲のかけらも無い。もはやシティルはそれを受け止めるのも苦しげで、動きが鈍いのにも関わらず、だ。

そろそろいいだろう、とメイリアは脇にまわり彼の虚をつくが、シティルはそれに反応し、一撃を受け止めてやり過ごすだけで精一杯だった。それでもメイリアに言わせれば賞讃に値すると言って良い。

だが今のメイリアに優しさという言葉は似合わない。次の一振り、シティルは反応することすら出来ずに、倒れ込む。

首筋にひやりと当たる鉄の感触、それが剣だと気づくのに一寸彼は時間を要した。しかしすぐにその剣は引かれて、と同時に目の前

に微笑みをたたえたメイリアが居ることにシティルはようやく気づいた。

「ご苦労様」

にっこり、とメイリアはシティルに向かってそう述べた。
シティルはただ呆然と座り込んだまま。なにが起こったか理解が出来ないという風に。

「勝負あり！　勝者、シアナ・スーティア！」

瞬間、メイリアの耳をつんざくような大歓声が場内に響いた。
それは負けたシティルを心配するものではなく、勝者メイリア――シアナへの称揚であった。
いつのまにか周りに居る騎士たちはシティルではなく、シアナを応援していたようだ。なぜだかはわからない。だがしかし、それができるのがメイリアの魅力だった。

――――実はメイリアは幼少の頃から剣術をスースティア将軍に習っていた。
それはなにもメイリアに限ったことではなく、メイリアの姉であるサーシャリアや兄のフロレンス、妹のシティアナに対しても同じように剣術の稽古というのは義務として課せられていた。
それは王族として必要なときは自分の身を守れるように、という理由からであった。

王家転覆を狙う者が居ない訳ではないし、またその王位継承権を目障りに思う者、または利用しようと思う者、様々な利害関係の中

にあるメイリアやその兄妹たちは自分の身は自分で護らねばならないという状況に時たま陥ることがあった。
四六時中護衛の騎士が周りに張り付いている分けにもいかないし、なにより公務などで人前に出た時などの狙われやすさ。

故にメイリアの父リーチャースは子供たち全員に基礎の剣術を習うことを義務としたのだが、しかし思いのほかメイリアには剣術の才能があった。

すぐに将軍を驚かせるほどになり、次第にメイリアも剣術を習うことに楽しさを見つけ、努力を欠かさず、自ら進んでその道を極めた。
そんなあるとき武術の国と称されるダウローンから国の剣術大会で優勝したという女剣士がスースティアにやって来た。

メイリアは父リーチャースにねだり、その剣士を一年間王宮お抱えの剣士として、自らの剣術の指南役とした。
なぜならスースティアの面倒な、“王族の女は十歳から成人するまでは親類以外の人前に無闇やたらと出るものではない”という伝統のせいでメイリアは将軍から剣術の指南を受けることが叶わなくなってしまったのである。

しかしこの伝統の“人前”とはすなわち、男性の前を意味するのだ。
それが女というなら話は別である。というわけでメイリアは一年間、そのダウローンの女剣士に徹底的に剣術を教わった。

――慈悲を捨てろ。
――相手の動きを読め。
――――相手を、征服した者が勝者なのだから。

そうやって教え込まれ、幼い頃から鍛錬を積んだ彼女に、シティルが勝てるはずがないだろう。

「シティル、」

メイリアが柔らかい声で呼ぶ。すると周りは途端に静まり返った。メイリアの一挙手一投足がこの場の空気を左右する。

「貴方の攻撃は単純よ。もっと太刀筋を見極めて剣を振りなさい。そして力だけでは相手を征服できないことを知りなさい。貴方より格下の馬鹿や阿呆を相手にするなら、いまの貴方でも十分かもしれない。けれどそれ以外は駄目ね。通用しないわ」

シティルはその言葉に唇を噛み締める。その唇に力が入りすぎて血が滲むほどに、強く。顔は屈辱に歪んでいる。まるではじめて見下されたかのように。

「それから……そうそう、私の望みを聞いてくれるんだったわよね？」

「……なにが望みだ、早く言え」

若干ふてくされたようにシティルはそう言い放つ。しかし約束は守るようだ、とメイリアは少し感心した。

（さてこの傲慢な男に一体何をさせようか。なにがこの男の一番嫌がることなのか。――私の身の上を知らないこの男を、どうしてくれようかしら？）

メイリアはおもちゃを手に入れた幼子の気分だった。つい、楽しくて頬が緩んでいる。
そして彼女は思いついた。一番の上策を。
「そうね……、“私のことを忘れないこと”が私の望みよ。よく、覚えておきなさい」

シティルは構えていただけに、そのいまいちな望みに首を傾げる。もっと違うことを想像していたシティルにとってはあまりにも拍子抜けな望みだった。

負けたのにも関わらずたったそれだけの望みしか言わない彼女。逆に言えばこの勝負にかけていた気持ちはそれだけのものだったのだ、ということに気づいたシティルは顔をしかめた。

メイリアは少女のような笑みを浮かべて微笑む。
大陸一と言われる美貌、神の至宝、そんな呼ばれ方をする彼女の微笑みに周りにいる男たちは知らずに顔を赤らめる。
無論、シティルも顔は赤い。がそれは周りの男たちとは理由が違う。
「――――わかった」
メイリアに目の前にいる男の騎士としての面目を気遣うという気持ちは微塵もない。まぁ逆に気遣われてしまっても立場がないのだが。

「そう。……ではお邪魔をしました。皆様も稽古に励んでください
ませ。また覗きに参らせていただきます」

上機嫌にメイリアはこの場から出て行く。その身にすべての騎士たちの注目を集めながらも、まったく動じない姿は彼らになにかを感じさせた。

すらり、と一歩を踏み出せばもう、だれもメイリアを引き止めはしなかった。ただ、その姿を見るだけ。

まるで嵐のような彼女。メイリアはこの訓練場から出て行った。

「――おい、シアナ・スーティアだっけか？　一体、何者だったんだ？」

静まり帰った訓練場。誰かがぽつりとその言葉を発した。

皆の頭に残った、ひとつの疑問だった。

――――訓練場から出て行ったメイリアの顔は、誰がみてもすがすがしいそれだった。

そろそろ最初に案内された部屋へ戻ろうかと考えてはみたけれど、未だメイリアの好奇心は収まるところではなかった。

なんと言っても、どこを歩いても新鮮な景色がメイリアの目を楽しませてくれるし、この王宮もさすが“雪華（せつか）”と呼ばれるだけあり大変美しいのである。

どこの国の王宮も正面は美しいが、裏側や奥に行けば行くほどその外観は廃れて行くものである。けれどこの雪華と呼ばれるクラフ

ィティア王宮は、その名にふさわしくどこまでも白く、どこまでも華やかで美しい。

（さて、どこまで行きましょうか？）

「メイリア様！　お待ちくださいませ！」

そのときメイリアの耳に、高く急いた声が届いた。不思議に思って振り返ると、そこにはドレスをたくし上げてメイリアの元へ走りよってくる女性が居た。

おそらくメイリアを探して色々なところを走り回ったのだろう、その紅茶色の髪はひどく乱れて、息も弾んでいる。

それなりに上等な深緑色のドレスを着ているところを見ると侍女か、とメイリアは見当をつけた。

「あら、なにかしら？」

「メ、メイリア様！　おひとりで出歩かれては困ります！　必ず侍女か女官を供に付き添わせてくださいませ……――――！」

息も途切れ途切れになんとか話す彼女は、己側の失態を棚に上げていることに気づいていないのか。そもそもメイリアを一人きりにしたのは自分だということに気づいていないのか。

メイリアはこの子は愚かなのかしら、と顔を顰めないように、よくよく観察する。

（まぁ、でも私が勝手に出歩いたのは事実ですし……非があるのも）

「ごめんなさい、このお城がとても魅力的だったから見て回りたくなったのよ」

「い、いえ。……ご理解いただき嬉しゅうございます」

メイリアの言葉に、目の前にいる彼女ははっと目を見開き少しだけ肩を縮こまらせた。そしてきまり悪そうに視線を動かしたあと、小さく頭を下げた。

彼女はあんなことを次期王妃に言ったのである。メイリアが癇癪持ちだったなら彼女は盛大に叱責を食らっていたことだろう。

（言ってしまったあとに気づいたということは、ただ単に思慮が足りないだけで愚かではないわね）

メイリアはそう、彼女に評価を下した。

「それで、あなたのお名前は？」

「あ、私はメイリア様の侍女になりました、ジェーン・ラティーヌコットともうします。今は無き、ラティーヌコット侯爵家の長女でございます」

今は無き、ということは没落したということだ。

侯爵家ともなれば大貴族である。資産もそれなりにあり、蓄えも十分すぎるほどあったはずだ。でなければ長く侯爵家という体面を保つことはできない。

それなのにこの安定したご時世に、侯爵という位の家が没落したということは、なにか裏が有ると思ってまず間違いない。

メイリアも一瞬でそれを読み取った。そして目の前にいる彼女に多少の哀れみを感じた。

しかし同時にメイリアは彼女の茶色の瞳に、闘いの色を点した火があることにも気づいていた。

――――ジェーンは似ている、似ているわ。

「本日は国王陛下から正餐の招待をされております。お美しく着飾って、国王陛下を驚かせて差し上げましょう」

「それは、絶対に遅れることは許されないわね。――さ、そのための準備を手伝ってくださるかしら？」

メイリアはジェーンに微笑んで、一歩を踏み出した。

樹陰に隠る

「国王陛下、どうか気を落ち着けてくださいませ」
「……わかっている」

むすり、と明らかに不機嫌な顔を隠そうともしないアルフィーネに、彼をたしなめている側近からは苦笑にも似たため息が漏れる。
しかしアルフィーネの幼馴染み兼側近のリストには彼の苛立つ理由も、理解できないわけではなかった。

なにしろ抜け出した会議に嫌々に引っ張ってこられた後に、よく言えばのびのび、悪く言えばのろのろと話す多くの各大臣閣下に時間を目一杯に使われ、それさえ無ければすぐにでも審議終了しそうな必要法案を審議し、国王の名の下にそれを認可。
ああやっと終わったとその場を去ろうとすれば、世襲お貴族の文官に引き止められ、その次には武官にやたらと絡まれる。

武官がアルフィーネによってくるのはいつものことなのだ。
なにしろ彼は歴代の王の中でも武術に優れ、しかしそれに傾倒し過ぎず伝統にも囚われない。彼は古き善き伝統は残し、悪しき因習を排した。これは多くの武官に好感をもたれ、常日頃から彼は良い意味で武官から絡まれるということが多かった。

しかし彼の癪に触ったのは、前者の方ある。
この世襲お貴族文官、というのは先々王の治世に根をはやした腐った樹のことである。
先々王というのは御年八歳という幼年でその玉座に身置いた。そ

のことも実は“樹”に仕組まれたことであったのだが、それはこの際端に置いておこう。

先々王はその幼年故に宰相に権限を一任し、当時の宰相は王よりも強大な権力をそのことにより保持していたといって過言でない。しかし当時の宰相はつくづく腐ったもので、次々に貴族に、また殊更自身に都合の良い者たちに有利になるような法を整備した。

樹はやがて互いに癒着をはじめ、次第に巨大な一本の樹となり、その根を王という玉に根深く下ろすことになる。

数々の悪しき因習が生まれた先々王の治世を、今の宮廷人たちはこう呼ぶ――――“森々(しんしん)たる樹陰(こかげ)”と。

この時代に根を張った樹々の子孫が、世襲お貴族文官というものだ。

親のあとをついで大した苦労もしないで成り上がった文官。いままではアルフィーネが野放しにしていたが――正しくは他の案件で手がいっぱいだっただけ――彼の癪に触ってしまった今、そうはいかない。

利用価値(つかえない)の無い臣下を従えている王は他国からその本質を疑われる。

愚鈍遅鈍(つかえない)な臣下は百害あって一利なし、彼らに待つ未来は廃棄処分のみ。

苛ついているアルフィーネの、口端がかすかに上がったのをリストは確かに見た。それだけでリストはすべてを理解し、明日には”

廃棄処分”の準備段階に取りかかれるように信用できる文官に小さく指示を出した。

「ああ、そうそう陛下。晩餐にメイリア姫をお誘いになる、とのことでしたが」
「ああ？　それがどうした」

リストが思い出したように口にすれば、アルフィーネはくだけた口調で返した。それにリストは苦笑しつつ、彼はそのまま返した。

「そのお話を聞きつけたリファネーズ様もご一緒なさると、先ほど連絡がありまして。さらにレエル様からも、アナシーア様からも同様にと」

レエルとアナシーアもアルフィーネの姉弟である。
この話のつまるところは、アルフィーネの姉弟たちは皆、メイリアに興味津々だということである。

「また」
「……まだなにかあるのか？」

そのアルフィーネの嫌そうな視線に、含み笑いをしながら頷くリスト。
彼は最初からこの話をおもしろがっているだけである。

「リディア様も、雨雪（あまゆき）の塔からわざわざいらっしゃるとのことで」
「――――母上まで。ああ、では……籠の間で食事をとることにしよう、皆に伝えておいてくれ」
「かしこまりました」

そしてその日の夕刻、暗空（あんくう）の刻に籠の間へ案内されたメイリアは少しばかり驚いた。なぜなら侍女になったジェーンから最初に聞いた話ではアルフィーネと二人きりで食事をとる、ということだったからだ。

しかしそれがどうだろう。籠の間へついてみるとそこにはアルフィーネの他に四人もいるではないか。

「まぁ、メイリア様！　どうぞこちらへいらしてくださいな」

入り口で少々立ち止まってしまったメイリアに声をかけたのは豊かな銀の髪が目を引く、壮齢の貴婦人であった。

「王太后陛下とお見受けいたします。本日はこのような場に……――――」

「まぁ嫌だわ、メイリア様？　王太后などと……どうか母様と呼んでくださいな。ねぇ、そうおもうでしょう、アナシーア？」

「ええ、そうだわ！　ねぇメイリア様、私たちは家族になるのですから」

王太后リディアを含め、クラフィティア王族は皆気安い性格であった。もちろん公式の場ではそれなりに威厳をもって発言をするし、振る舞いもする。けれど決して奢り高ぶってはいなかったし、嫌みな態度をとったりはしなかった。

そのことでメイリアの緊張は一気にほぐれた。

「メイリア姫、母上もきっとその方が嬉しいと思うのです。僕から

もお願いします」

リファネーズからもこのように言われてはメイリアはもはや断る理由も無かった。

「では、母様と呼ばせていただきますわ、是非に。ですが、そのかわりに私のこともどうかメイリアとお呼びくださいませ、――母様」

「ではそうしましょう。メイリア、私の可愛い娘になる子」

このリディアの言葉により一気にこの場にいる者たちの距離は近くなった。和気藹々とした雰囲気が場を包み、この場にいる顔ぶれを考えれば礼儀作法を重視した正餐になるはずもなく。

メイリアは特に紹介などをされなくても、事前の知識としてこの場に居る人たちの名前などは知っていた。

――王太后である、リディア・リセ・アリファ＝クラフィティア。ダヤ大陸にある国の一つである、メリモーネの第一王女であった。政略結婚であったが亡き先王とは仲睦まじくあったとメイリアは聞いている。

そのリディアの子供は、四人。

アルフィーネとリファネーズ。そしてアナシーア。

アナシーアはリディアの初子であり、年は二十五である。彼女は既に臣籍に降嫁したため王位継承権は放棄している。豪奢にうねる金の髪は、向日葵の二つ名を頂いている。

そして第三王子、レイル・ノブル・フィア＝クラフィティア。彼は寡黙の王子と貴族の娘の間でもっぱらの噂だ。

アルフィーネとリファネーズも、そしてアナシーアも美しいことこの上ないのだが、彼だけは別格である。憂いを帯びた切れ長の目、目鼻立ちの整った顔は俯いただけでもなにかを感じさせる。

加えて彼は先祖帰りのために黒髪を持っているのだ。その黒髪に、リディア譲りである紫の瞳。金、プラチナと輝く髪を持つ王族の中に、黒髪をただひとり持つ美貌のレイルはかなり人目を引くのだ。彼は十六ということもあり未成年のため、未だ婚約者すらおらず、年若い貴族の娘たちからとてつもない秋波を常に送られている。

メイリアはリファネーズがおもしろおかしく、今日の会議中のアルフィーネの様子を語るのを聞きつつ、レイルに意識を向けていた。未だ、一言も話していない彼にメイリアは話しかけようと席を立った。

「レイル殿下、どうかなさいましたか？」

つまらなそうにしているように見受けられるレイルに、メイリアはそっと言葉をかけた。もしかしたら自分の存在が気に食わないのかもしれない、と心の内でおもいながら。

「いえ、特には。――話すことは、苦手で。メイリア様こそ、俺を気にせず、母や姉と」

「メイリア、とお呼びくださいな。たしか、お年は私と同じくらいでしたよね？」

スースティアとクラフィティアの成人は、十七である。メイリアはこの間、十七になったばかりだ。彼女はレイルの年齢を知っていたが、わざとそのように聞いた。少しでも会話を交わすために。

「俺は、十六です」

「私はついこの間、十七になりましたわ。年が同じくらいなんです

もの、敬称は必要ございませんわ」

にこりとメイリアが笑えば、不思議とレイルは嫌な気持ちにならなかった。むしろ、自身の口端が上がる感覚さえしたのだ。

普段から貴族の娘連中に、にっこりと笑いかけられるときには嫌な気持ちが心を占領していくというのに。だからレイルは普段、女とは穏やかに話せる性格ではないのだ。

だからこのメイリアとレイルのやりとりを見ていたその他外野が、レイルが初対面のメイリアに心を開いて話をしている姿に感心していたのだが、それを二人は知らない。

「レイル様、とお呼びしてもよろしいでしょうか？」

「どうぞ」

黒髪で美貌。それだけがレイルが貴族の令嬢に人気である理由なわけではない。

その物腰、しぐさ。ひとつひとつがだれよりも洗練されているのだ、彼は。

決して言葉は多くないけれど、ただ椅子に腰をかけているだけで。その足を組み替える動作だけで。なぜか彼は人目を引いてしまうのだ。

そしてメリイアは気づく。普段はそれを見せていないだけで、本当は彼の話術はこの場にいる誰よりも巧みなのだということに。メイリアにも楽しめて笑えるような話題を振り、話を聞くときは適度に相槌を。

（それを自然に彼はやっているのだわ）

――――意図的にその技術を習得したメイリアだから分かることであった。

「そういえば――――今日は随分と面白い話を聞きましたよ」
「あら、どんな？」
「いえ、俺は……第三王子直属という名目で精鋭の騎士団を率いているのですが。今日はそこにとてもかわいらしく厳(いか)めしいお客様がいらっしゃったそうで」

メイリアはぎくり、と肩をすくませたい思いだった。
なんといっても、彼女の勘が合っていればその“かわいらしく厳めしい客”とはまぎれもなくメイリアのことであるからだ。

――なんでも静々とやって来て見学していたかと思えば、突然憤り始めて、筆頭騎士のひとりと手合いをして、大勝してしまったとか？

「たしか、名前は……」
「――――っ、レイル様！」

（確信犯ね、この方は！）

そのとおりだ。レイルはその“かわいらしく厳めしいお客様”の名前を騎士団の一員から聞いたときに、既に確証があった。一応、あの場に居た団員には箝口令という名の脅しをしておいたから外部に漏れる心配はないと思っているレイルだが、“それにしてもこの姫君は”と少し呆れたのも本音である。

あのメイリアが偶然出くわした騎士団の存在意義は、個々の統率力を上げることにある。
十二ある騎士団のそれぞれから数人ずつ選抜した彼らは、クラフィティアの中でも力のある者たち。彼らはそれぞれの団に戻れば統率者という立場になる。つまるところ、まずあの選抜した者たちで意思の統一をはかり、ひいては騎士全体の行動の統一をはかるのが狙いなのである。

メイリアにもそれは理解できる。
けれどメイリアに言わせてみれば、あの集団は生ぬるい以外のなにものでもないのだ。あれを見れば、この国の未来が透けて見えるようだとメイリアはおもう。

内乱の鎮圧、他国の侵攻の排除。騎士団といえばそのような任務をやらなければならない。時には魔導士たちと協力し、戦火をくぐり抜ける方法もあるが、それでも戦といえば、剣術が重視されるのは今の世では間違いない。

騎士の剣術の程度が知れれば、その国の程度が知れるというもの。

「どうかしましたか」

メイリアは悩んだ。
ただの王妃としてこの国に戴かれるだけか、それとも少々型破りなことをしてでもこの国に尽くすべきか。
きっとメイリアが口を挟まなくても、あそこに居た騎士たちはある程度までは自力で這い上がってくる。それくらいの力量が彼らにはあったのは事実だ。

――王族という枷がメイリアから自由を奪う。

でも、とメイリアは今日馬車の中からみた民の顔を思い浮かべた。

（……あの民草の笑顔がこの先もずっと続くことを願ったばかりではないの、私は）

今まさに、ひとつの覚悟を決めるときがメイリアに訪れていた。

「私は、……出来ることはすべて行いたいのです。――そのすべてはいずれ国の民の笑顔のためになるから」

その言葉を聞いたレイルは、目元を緩ませた。

まるでメイリアからこの言葉を待っていたかのようなその表情に、なんとなく彼女は敗北感を覚えた。

「では、後ほどお話をしましょう。今日はもうお開きのようだ」

その言葉を聞いてメイリアがアナシーアの方を見やると、彼女の横に一人の男性が立っていた。鳶色（とびいろ）の癖のある髪と瞳が見事なその男性は、アナシーアの頬にキスを落としている。

メイリアがそれを見ていると、アナシーアが気づき、その男性をメイリアに紹介してくれた。

「私の夫ですの。フィシオンと言います。貴方、こちらはメイリア様、今日スースティアからいらっしゃったのよ、とは言っても知ってるわよね」

「お目にかかれて光栄でございます、フィシオン・カーク・エディンラタでございます。侯爵の位を賜っております故、以後何かとメイリア様のお目にかかる機会も多いことでしょう」

長身の彼はアナシーアと並ぶと、引き立て合ってより互いを美しく見せる。

きちり、と礼をこなしてはいるものの堅苦しいという印象はなく、それがまたメイリアに好感を持たせた。

「これは宰相の任についている。見かけより遥かに腹が黒い。メイリア、気をつけろ」

「いやはや陛下、ご機嫌麗しゅうございますか？　陛下こそ、随分とお心が狭いことですね。その様子ではすぐに愛想を尽かされてしまうことになりかねませんよ」

「――――黙れ、人でなしめ」

「ああ、私めは確かに人でなしでございますが、それでしたら陛下はさしずめ、碌でなしという所でございましょうか？」

メイリアの横に立ったアルフィーネはフィシオンと少し言い合った後に、彼をしばらく睨んだ。それを好まし気に微笑んでやり過ごしているフィシオンをみると、どうやらこの二人はとても仲が良いということをメイリアは理解した。

「そんなに見つめるなよ、アルフレド？　俺に男色の趣味はない」

「フィオン！　幼名（ようみょう）で呼ぶな！　それに俺にもそのような趣味は無い！　――くそっ。メイリア行こう！」

「え、あ！　……失礼、します――？」

どうやら言い合いに敗北したらしいアルフィーネに引きずられて、メイリアは急ぎ足で籠の間を後にすることになる。――その後ろ姿を、残った一同に生暖かい目で見送られながら。

樹陰に隠る（後書き）

暗空の刻　＝　二十時

ちょっと遅めの時間に夕食ですが、リディアが雨雪の塔から来るのを待ったためです。”雨雪（あまゆき）の塔”が何であるのかはまた別の話で、ご説明しますのでお待ちくださいませ。

王の瞳、その奥に

（ああ、どうしようかしら。困ってしまったわ……）

食事が終わり、引きずられるようにアルフィーネと彼の私室にやって来た後。ジェーンはお茶を用意してすぐにどこかへ行ってしまうし、だれか他に女官なり、侍女なりを呼びつけようかと思ってもそれが出来ないほど気まずい空気が流れている。

メイリアはどうしたものか、と途方に暮れていた。

話でもして互いに仲を深めるべきなのだろうけれど、それにしたってアルフィーネはこの部屋に来てから一言も発さないし、メイリアはなにか自分が粗相をしたのかと自問自答を繰り返すばかりだった。

そしてどれほどの時間がすぎたのだろう。

ついにアルフィーネがメイリアの方を向き、一度髪をかきあげた。すう、と彼が息を吸う音さえ聞こえるほど、この場は静かだった。

「メイリア」

「――はい、なんでしょうか？　陛下」

しん、と静まり返った部屋にふたりの声だけが響いた。

ふたりだけで話す、ということ自体にメイリアは少し緊張していたのかもしれない。いやそれ以上にアルフィーネと一緒にいる、と

いうことに緊張していたのかも知れない。彼女の声は知らず、うわずり震えていた。

「メイリア、――なにをそんなにおびえているのだ？」
「えっ、……決してそのようなことは」
「そのようなことは無いと言うか？　俺にはそうは思えないのだが？」

アルフィーネの発した声は、低く、静かに怒気を含んでいた。

「レイルと話しているときは、生き生きとしていたと俺は記憶しているが？　なんだ、俺が恐ろしいのか？　レイルと話して、惹かれたか？　それはそうかもしれな。なにせ彼奴（あやつ）とは年も近い」

そんな風にメイリアに話しかけるアルフィーネのその言葉は、ひどく痛かった。
メイリアに話しかけているようで、その実そうではない言葉。なにか秘めた炎をしずかに青く燃やし、こちらまでその業火が忍び寄ってくるのではないかという恐怖。
そうやって恐れを抱くのは、メイリアがまだその炎の意図を掴めていないから。

「メイリア、俺の求婚を受け入れたのはどうしてだ？　気まぐれか？　それとも哀れみか？　誓いの書を使った俺をあざけったのか？」
「そんなことは決してございません！　どうしてそのようなことを聞くのです、陛下」

「――っ、陛下、などと呼ぶな！」

そのアルフィーネの瞳に宿る炎は、紅かった。
紅く紅く燃えたぎる、嫉妬の炎であった。

晩餐の最中、ずっとメイリアを見ていたアルフィーネは彼女がレイルと楽しげに話をしていることにずっと嫉妬を覚えていた。
実の弟に、と言ってしまえばそれまでだが、アルフィーネにはそれさえ我慢が出来なかった。何せ彼は――――怖かったのだから。

アルフィーネにとってメイリアはずっと想っていた相手。
彼女に求婚したときに使用した誓いの書とともに送った手紙に記してあったとおり、アルフィーネはもう随分長い間メイリアのことを一途に想って来たのだ。もうずっと前から。
だがしかし時が流れメイリアが成人し、彼女が数多の求婚を申し込まれていることをアルフィーネは耳にして知っていた。同時に感じる、ずっとずっと想ってきた相手が、だれか他の男のものになってしまうかもしれないという恐怖。

何にも屈しないクラフィティアの賢王は、その恐怖には屈した。
それに屈した彼は“誓いの書”という形で彼女を自分に束縛した。

しかしそれでも不安は尽きることを知らない。
今度は彼女の心を、本当の意味で手に入れていないことが彼を恐怖させた。
どんな魔法を使おうと、どんな薬師の薬を使おうと、本当の意味でメイリアがアルフィーネに惹かれなければ、彼女の心がアルフィーネのものになったとは言えないからである。

その不安に苛まれている時、レイルと楽しげに並ぶメイリアを見た。
まるで彼の不安が現実のものであるかのような、その光景。
もう、彼は限界だったのだ。

嫉妬、などという言葉ではない。
彼は妬心に狂うほどメイリアを、心から、心の底からずっとずっと愛していたのだ。

しかしそんなアルフィーネの内なる心の嵐とは裏腹に、彼は王であるが故にその心を顔に表さないことに長けていた。メイリアが彼の心の中を知るすべなど、ありはしないのだ。
あるいは王太后のリディアや、王弟リファネーズなら分かったかも知れないが。

――――私は嫌われているのかしら。
呼ぶな、ということは。私に名を呼ばれることすら嫌だということ？　だとすれば私はどうすればいいの？
誰も私の味方がいないこの土地で、寄り添うべき相手に見放されそうな私は一体どうすればいいの――――

「――――っ、っふ」

ぽろり、ぽろり、と目から涙がこぼれ落ちる。

何に対して悲しいのか、メイリアはもう自分でもよくわからない。けれどただ何となくおもうことは、もうこの部屋には居られないということ。

メイリアの小さな嗚咽にアルフィーネは、はっと顔色を変えた。そのメイリアの瞳から落ちた涙を目にして、アルフィーネの顔からほんの少しの陰りが姿を消した。

「っ、失礼しますっ……」
「――――っ、メイリアッ」

アルフィーネは咄嗟にメイリアの名を叫んだが、彼女の耳にはもはやそれは届いていなかった。
メイリアは精一杯であるのだ。彼女は“もうアルフィーネに自分は必要ない”と思い込んでいる。そんなメイリアにアルフィーネがどんな声で呼びかけたとしても、それは無意味であるというものだ。

たとえ、その声が。
焦り、うわずり、彼女を失うことだけは絶対にしたくない、という愛しさをはらんでいたとしても、だ。

“失いたくない”。
たったそれだけの単純な思いが、アルフィーネを突き動かした。
出て行こうとしているメイリアの腕ををアルフィーネは、ほぼ無意識に距離を縮めて掴んだ。

「――――へ、いか」
「メイリア、お前は先ほどから誰を呼んでいるんだ？」

「陛下を、お……びして――――」

お呼びしております――――と言おうとしたメイリアの言葉は、アルフィーネにのまれた。そう、文字通り“のまれた”。

メイリアは唇にあたたかさを感じた。
自分のものとは全く違うその唇と、自分のものとひどく似ているそのあたたかさにくらくらと目眩がする。
柔くけれど熱を帯びているそれは、ほんの少しの力でメイリアを拘束する。腕の中で身体が震えるくらいには、大切にされていると感じるくらいには、ひどく優しい。

しばらく合わさったままの唇。
まるで昔、互いにひとつのものであったと錯覚するくらい離れるのが惜しい。

「メイリア、最初に言っただろう？」
「……え？」
「俺のことはアルフと呼んでくれ、と」

メイリアは胸に痛みが走るのを感じた。それは信じられないくらい甘美な痛み。
なぜなら、メイリアの硬直していた心に深く深くアルフィーネの心が突き刺さったから。

その甘い痛みが、メイリアの涙を誘う。
終わりなどないかのように次々と溢れ出す涙に、メイリアは知らず幸せを感じた。

「俺以外を見つめるな。俺以外に微笑みかけるな。お前も見知らぬ土地に来て不安かも知れぬが、俺だって、不安なんだ……お前の、心が欲しいから」

言葉を終えると同時に彼は額をメイリアの額にくっつけた。
こつり、と可愛い音がしてメイリアとアルフィーネの視線がごく近いところで絡まった。

「メイリア、俺はうわべだけの言葉は欲しくない。空っぽの心もほしくない」

メイリアはこくり、と頷く。確かめるようにアルフィーネを見つめながら。

「メイリア、――お前の本当の言葉と心は、……俺のものだろう？」

メイリアは涙を流しながら、何度も何度も頷いた。
言葉にならないくらい、胸が詰まる。でも声にならない言葉が目の前にいるアルフィーネには伝わっていると、メイリアはどうしようもないくらいに感じていた。

――私の心も、躯も、言葉も、すべてあなたのもの。

「アル、フ」
「メイリア、好きだ。愛している」

もう、十分だった。もう言葉は必要なかった。
メイリアに触れるアルフィーネの手が、吐息が、視線が。
すべて、全力でメイリアに愛しいと叫んでいたから。

そばにいるアルフィーネの肌の温かさ、見つめる視線の強さ、それから互いに満たされた心。それだけで幸せになる条件はそろっていた。十分だった。

ふたりは互いに求め合った。
確かに結ばれるために。ただ純粋に好きという気持ちから。

そこには煩わしい策略や駆け引きのため、というくだらない理由は無かった。
ただ理由があるとするなら。それは永遠にともにいるため。

ふたりはたしかにきつく抱きしめあった。

†　†　†

「ん、……ま、ぶし」

朝、ひかりのまぶしさにメイリアは目が覚めた。
うっすらと目を開けると、見慣れない景色。スースティアで慣れ親しんだころの風景と重なって、違和感が否応無く彼女を包む。
自分がいるのは一人が寝るには広すぎるベッドであると認識し、一体ここはどこなのかと考える。そして視線を巡らすと、だんだん

とよみがえる記憶。

（そうだわ、ここはアルフの部屋！　晩餐のあとここに来て、それから――――）

そこまで考えた瞬間、メイリアは恥ずかしくなり思考を中断した。しかし恥ずかしさから逃れるため、ベッドの上掛けをひっつかんでかぶったことにより、自分が一糸纏わぬ姿だということを確認してしまい、逆に顔から火が出るような思いを味わうことになった。

少し冷静になり、傍観するように自分の躯をみると見慣れぬ鬱血（うっけつ）があちらこちらにある。それをアルフィーネがつけたのだと想うと妙に愛しくて、胸にある一つをメイリアはそっとなぞった。

「おはよう、メイリア」

ひとりでふふ、と笑っていると、少し離れたとなりの部屋に続く扉のそばから低く優しい声が響いた。

メイリアの名を呼ぶ、その声。神々しい金の髪が朝日に輝く、メイリアの夫となる人。

彼はメイリアが起きたときにはもうベッドにおらず、彼女の前に既に着替えた格好で現れた。まだメイリアに公務は無いが、彼には広大な国土のあちこちから問題が寄せられるのである。

「アルフ……おはよう」

そばにいる。

そして“愛しい”と言葉で、躯で、確かめあったという事実がふたりの言葉をひどく優しく、そして甘いものにした。

メイリアは心がなにかきらきらとしたもので満たされていることを、ひしひしと感じていた。

（これを幸せと、人は呼ぶのね）

「その、メイリア……、平気か？」

「ええ！　なんともありませんわ」

アルフィーネが躯を気遣っているのだと分かって、あわてて躯をベッドから起こそうとすると、突然鈍い痛みがメイリアに襲いかかって来た。

あまりの痛みに顔を顰めると、アルフィーネは心配そうにそばに寄って来た。

メイリアは心配をかけまいと必死にその痛みに耐える。徐々に薄くなってゆく痛みに比例して、メイリアの肩の力も抜けていく。

「大丈夫ではないな」

「はい……」

しょんぼりしていると、アルフィーネはメイリアの寝転がっているベッドの端に腰をかけて、彼女の髪をゆっくりと撫でた。長いメイリアの髪を一房すくい、指でくるくるともてあそぶ。

「今日はゆっくりしていろ」

「でも！」

「愛しい未来の王妃に何かあっては俺が公務に集中できない。わかってくれ」

その一房の髪にキスを落としながらアルフィーネはメイリアにそうささやいた。

もちろん、アルフィーネはメイリアの言いたいことは分かっている。

実は今日は月に一度の朝賀（あしたが）という一種の催しがあった。
朝賀とは、その日の朝に国王が正面のバルコニーへ出て民に演説をする催しのことである。もちろん城下やもっと遠いところからこれを見に大勢の蒼生（そうせい）が集まるのであるが、王宮に仕える者の大半は必ずこれに参加するのである。

今日の朝賀（あしたが）でアルフィーネはメイリアを民衆、そして宮仕えのものに紹介するつもりであったのだ。
自分と仲睦まじい姿を見せれば民が安心するだろう、とアルフィーネは考えていたのである。

そしてこれはメイリアのためでもある。
王宮において、広くそのメイリアの姿を認知させるということは、彼女の手腕、器量を皆に知らしめるということ。彼女の味方をはやくに作るということに繋がる。
いまのうちに、彼女の味方――信用に足る者――を城の中に増やしておかねばならないのだ。まだ、森々（しんしん）の樹陰（こかげ）が暗躍を自重しているこの時期に。

そしてそれの重要さはメイリアも理解している。
森々の樹陰という厄介なものの存在をメイリアは知らないが、それでも信用できる者を多く作るということはこの王宮を手中に修めるという点で非常に重要で、欠かすことのできない、“王妃の仕事”のひとつであるのだから。

けれどアルフィーネは実際にメイリアを見て傍にいるということをして、考えを変えた。確かにメイリアを披露するために、朝賀（あしたが）の予定をこの日に組み入れたのはアルフィーネである。
けれどそんな、根回しのようなことはこの“真珠姫”にかぎっては不要だ、と感じ、考えを変えた。

「顔見せなど、いつでもできる」
「……わかりました。でもお散歩くらいはよろしいでしょう？」
お散歩、ということはつまり、朝賀でバルコニーには乗らないが侍女にまぎれて、アルフィーネの演説は聞くということだ。
アルフィーネはそれに気づいて目を一瞬見開き、ひとつ笑った。

――――真珠姫、そのくらいの器を持っていねば大陸に名は轟かない、か。

アルフィーネはもう、メイリアを咎めはしなかった。

企みは完璧に（1）

それから半月のときが流れ、水地（すいち）の月になった。
正確に述べるならば、水空（みずそら）の月と真水（しんすい）の月以外は一ヶ月が二十九日であるから、半月とはおおよそ十四日間のことである。

朝賀（あしたが）での顔見せが延期になり、宮仕えの者たちに顔を見せる機会をメイリアがうしなったまま、一部の世話係と国王側近のみしか彼女の顔を知らず、メイリアの顔を知らないものが大半であったため、城の中はその噂で持ち切りであった。

そんな日、メイリアに与えられている部屋にルウゼ・ブロウロードという女性と第三王子のレイルが招かれ、お茶を供にしていた。
このルウゼは木漏れ日色の瞳と赤茶の長く癖の無い髪を持つ、すらりとした体躯の女性であった。おそらく普通の女性らしく着飾ったならば、とても美しいだろう。

しかし彼女が普通に着飾るということはおそらく無いだろうことは、彼女の役職を聞けば簡単に想像ができる。

「ルウゼ総将軍、今日は本当に忙しい中来てくださってありがとうございます」
「いえ、なんのことはございません」

そう、彼女はこのクラフィティア王国の軍事最高責任者なのである。もちろん国王を除いて、ではあるが。
総将軍、といえば男のような印象を勝手に抱くが、最近になりアルフィーネが出した法令によりクラフィティアは建前として“男女平等”をとっている。力があれば女ものし上がり将軍職につけるし、どんな地位にもつくことが出来る。だが近隣諸国でも例を見ないそれは、未だ浸透していないのが事実であった。仕方の無いことである。
しかし事実としてこのクラフィティア国軍のすべてをしきり、統括しているのは女性なのだ。

このルウゼ・ブロウロードという女性。
彼女はアルフィーネがまだ王太子であった頃、城下の孤児院を視察したときにその剣技に感嘆し、拾われた。もちろん最初は騎士団の下っ端から始めた。着実に実力をつけて、経験を積み、おおよそ一年と数ヶ月の御前試合の勝ち抜きで優勝し、アルフィーネが直々に総将軍へ任命した。
実力だけで将軍職まで上り詰めた彼女は、いまでは男女問わず身分の低い者の憧れである。

「それで、レイル様。私、“かわいらしく厳(いか)めしい”という評価をありがたく頂戴いたしましたので、ぜひ騎士団の稽古をつけたいのですけれど」
「おやメイリア、まだ根に持っていますか」

メイリアが先日の話をレイルに始めるとその横でルウゼが困惑顔を見せていた。なにしろルウゼの目の前に居る次期王妃には、かわいらしいという言葉こそ似合えど、“厳めしい”という言葉は似合わないからである。
加えてこのしとやかな姫が実はそこら辺に転がっている盆暗（ぼんくら）な奴より、数段も強いなどと一体だれが思うのか。

その困惑顔をひとしきり楽しんだあとにレイルは彼女にことの次第を説明する。もちろん、メイリアも笑ってそれを見る。

「――――そう、それで今日貴方を此処へお呼びしたのは、ふたつお願いごとがあるからなの」
「は、なんでしょうか？」

状況が飲み込めたらしい、と判断したメイリアは本題を切り出す。

「ひとつは、私がレイル様の率いる直属騎士団に稽古を付けることを許してほしいの」
「ルウゼ、俺も了承済みだ。俺からもお願いしよう」
「……いえ、しかし王妃様の御身の安全を考えますれば、騎士と剣を合わせるなどということを」
「ルウゼ、大丈夫よ。私が大して修練を積んでいない騎士に負けるはずはないわ」

当然と言えば当然なのである。

どこに国王の寵愛する王妃に向かって喜んで剣を上げる騎士がいようか。それにルウゼとしてはメイリアの実力が分からない以上、無闇に危険にさらさせる訳にはいかない。
それは軍事最高責任者であると同時に、国王並びに王妃陛下の護衛責任者であるルウゼであるから故の葛藤であった。

ルウゼとしては王妃を危険にさらす訳にはいかないのだが、彼女が騎士たちの力を上げてくれるような実力ある者ならば諸手を上げて迎えたいところなのでもある。

実際、この国の剣術の水準というものは高いのだとルウゼは思っている。
しかしそれ故に、飛び抜けた存在が現れにくいのもまた事実なのである。
皆、一定の水準までは簡単になってみせるが、それを凌駕するほどの力をもった指導者がこの国には少なすぎるのだ。

実際ルウゼが知っている中で、そのような“他を圧倒するような力の持ち主”は国王であるアルフィーネ、そして目の前にいるレイルくらいしか居ないのだ。

「――――、では」

苦渋の末の、ひとつの決断だった。

「メイリア様には一度、私と手合わせをしていただきます。その上で私が認める実力の持ち主ならば、喜んで許可しましょう」

「まぁ！　感謝しますわ、ルウゼ将軍」
「――……メイリア、貴女が稽古につけるようになったとしても、俺がいる場でしか認めませんよ」
「もちろんです、レイル様」

にこり、と笑うメイリア。
そしてそれを穏やかな紫色の瞳で見つめるレイル。
ふたりとも黒髪と、はっと驚くような美貌を持っているためか、並べば誰よりも似合いのふたりに見えてしまう。

実際、ルウゼは驚いていた。
普段はにこりとも、言葉の一言さえ積極的に交わそうともしないレイルがメイリアが居るこの場では、それをくつがえしているのだ。

寄り添えば一対の絵のような、そのふたりは。

「さてルウゼ様、よろしいでしょうか？　それで私のふたつめのお願いは――――――」

企みは完璧に（1）（後書き）

水地の月　＝　六月
水空の月　＝　八月
真水（しんすい）の月　＝　九月

企みは完璧に（2）

†　†　†

ルウゼはその日の午後、騎士団に所属するすべての騎士たちを大訓練場に集めた。なにも知らされずに集まった騎士たちは、一体何事かとざわついていた。

その集められた騎士たちの中には先日メイリアにこてんぱんにやられてしまったあの、シティルと審判だったセオリオの兄弟の姿もあった。

なにも知らされてない故の不安、それから好奇心。

もしかしたら自分がなにか将軍に功績を褒められるのかも知れない、などと夢物語を考える輩もひとりやふたりではなかった。

大訓練場に整列した、人、人、人。

それを傍観しながらルウゼは一歩、段上へ踏み出した。

「諸君、良く集まってくれた。何も知らせていないがゆえ、不安がっている者も居るかも知れないが、安心しろ。諸君らに悪い話ではない」

風が強く吹き、段上にいるルウゼの赤茶色の長い髪がふわり、と宙を舞った。

線が細く、華奢な印象を与える彼女の容姿に反した言葉遣いに、はじめてこれを見た者は少なからず違和感を覚える。
さらに彼女のどこまでも澄んでいる美しい声が、それに更なる矛盾を与えるのだが、ルウゼいわく、その澄んでいる声は戦場でよく通るために彼女自身重宝しているのだという。

「先ほど、スースティア王女メイリア次期王妃陛下よりお言葉を賜って来た。それによれば――“戴冠式（たいかんしき）の際の役目、皆平等に機会を”ということだそうだ」

悪い話ではない、というルウゼの言葉を聞いて騎士たちはなんとなく浮き足立っていたが、さらに加えられたルウゼの言葉により、その場を包む喧噪はさらに際立つことになった。

戴冠式というのは、その文字の通りに冠を戴く式である。
スースティアでは冠は国王とその正妃にのみ与えられることとなっている。
国王の戴冠式で、その冠を授ける側である大司祭の元へ運んで行く役目を負っているのは近衛兵である。
それは時には王の身近で手足となり動き、時には王を護る盾になることを誓うためだ。

反対に王妃の戴冠式では、その冠を運んで行く役目を負っているのは騎士である。
本来、騎士というものは王族護衛が一番の任務だった。けれど時代が変わるにつれてその持つ意味合いが変遷してきたのだ。

――王の手足となり動き、王を護る盾になる。

本来の意味はそこにあったのだが、その意味は少しずつ変わってゆき、いまでは“王の手足となり国のために動き、国を護る盾になる”という大義のもとにその存在はある。
王妃の戴冠式では、その大義を尽くし忠誠を誓うということを確認するのである。

この儀式の代表は通常、騎士団長によって行われる。
代々決まっていることなのだ。ゆえに騎士団長に将軍が異議の有無を問うだけでほぼ、団長がそれを行うことは決まっている。
しかしこれは――――――！

ルウゼの口ぶりから、メイリアの意思から騎士たちが推測すると、まるで騎士団長以外がこの役目を負う権利を有するというニュアンスで。

「ルウゼ様！　それは戴冠式での役目を負うことが私たち、下級騎士でも出来るということでしょうか！」

どこからともなく、すべての騎士の気持ちを代弁したような声が響いた。
推測の域をでないことでは喜ぶに喜べないからである。
問いの答を待つためか、騎士数千人がしんと静まり返る。

「そうだ、次期王妃であるメイリア様がそれを望み、国王陛下も了承済みだ」

一斉に騎士たちが熱気を帯びた。

それは当然である。このような例外というものは歴史に残りやすいものだ。
いままでにこのような例外は無かった訳だから、より、この役目を負った者の名は歴史に残りやすくなるというもの。
ここにいる騎士たちの大半は名を残してやろう、という野望のもとにクラフィティア全土から集まっているわけだからこのような機会を逃す訳がないのである。

そしてその機を与えてくれたメイリアへ、賛辞を述べる者もいれば、祈りを捧げる者もこの場にいた。

これほどまでに人心を一瞬で掌握できる姫が一体どこにいようか、とルウゼは感心すると同時にとてつもない恐怖に襲われた。
彼女の聡明さ、容姿の美しさ、心の穏やかさ。姫としての気質は十分である上に、物事に対する真摯な姿勢まで備われば、それはもう王妃として文句のつけどころもない。

つけどころがない故に、ルウゼは恐ろしかったのだ。
底知れぬ、彼女のなにかにルウゼの本能はおびえていた。

しかしそれを微塵も顔に出さず、ルウゼは再び口を開いた。

「だれかこの栄誉賜りたき者、おらんか！」

ルウゼは予測をたてていた。

この呼びかけに対して、此処に居る騎士たちは一瞬二の足を踏むだろうことを。
下級騎士たちは上官に対して、上官たちは騎士団長に対して、騎

士団長は“自分が名乗り出てしまったら、例年と同じではないか”とメイリアに気を使って。
もちろん女騎士もいるにはいるのだが、圧倒的にその数は少ない。故にこのような男所帯を統率するためには上下関係を厳しくするほかにないのである。
故の、二の足である。

だからルウゼは決めていた。
必ず一番に名乗りを上げた者にこの任を授けよう、と。

呼びかけて数秒がたっただろうか、やはり誰も名乗り出てこない。

所詮はこの程度かとルウゼが諦めかけた、その瞬間、ひとりの男が手を挙げ、名乗り出た。

「ルウゼ総将軍！」

その声の主を見るためにルウゼが視線を投げると、男は立ち上がった。ルウゼにはその男に覚えがあった。珍しいが故である。

――たしか、騎士の第六団に所属する大貴族の。
レイル王子直々の団にも所属しているはず。あの、有名な英雄の血を引いているとか、そうでないとか――

「私、名をシティル・リダート＝スティコットと申します。――ぜひ、その戴冠式での任を承りたく存じます」
「ほお？」

ルウゼはわざと馬鹿にしたような視線と声をその男に投げかけた。
ルウゼの出自はこの場に居る者全員の知るところである。もし、ルウゼの目の前にいるこの男が、貴族の権力だけで上りつめて来た馬鹿ならば怒り狂って反抗してくるはず。
ルウゼは実際にそういう馬鹿どもを何人も見て来たし、その度に返り討ちにし、そうしてのぼりつめてきた。

たとえ最初に名乗り出たからといってそのような馬鹿ならば、切って捨ててやろうとルウゼは思っていたのだ。

「どうか、私にその役目を」

しかしルウゼの考えとは裏腹にその男は、シティルはその場にひざまずき、騎士として国王陛下に向けても遜色無い礼をルウゼに向けた。
――あの大貴族スティコット家の次期当主と目されている、シティル・リダート＝スティコットが、だ。

その場は、騒然とし、けれど次の瞬間には静まり返った。

その場の騎士は皆、将軍の出方をうかがった。
そしてその出方次第で、次は自分こそが名乗り出ようと伺っていたのである。

「ふん、よいぞ、やれやれ。威勢の良いことは大変すばらしい。お前に任を授けようぞ」
「ありがとうございます」

シティルはひざまずいたまま、そう言葉を返した。

しかしルウゼの反応を伺っていた周りからしてみれば、一体どういうことかと騒ぎに発展しかけたが、それを察知したルウゼの一睨みによって場はすぐに静まった。

「誰かの後に続こうなどという卑しい者に、任を負わせる気は微塵もないわ、馬鹿者」

殺気とともにルウゼはその言葉を吐いた。その女帝に逆らったならば生きては帰れない、とその場にいた誰もが思い、黙った。

そして、この場は妙な緊張感と供に終了となった。

企みは完璧に（3）

†　†　†

「メイリア様、ルウゼ将軍がお見えになっています」
「通して頂戴な」

メイリアはアルフィーネに許可を貰って書庫から、スースティアには無かった本を持って来て読んでいた。さすがにスースティアより古くからある国だけあって、古書の数はスースティアを圧倒している。

そんなとき、午前中にお茶を供にしていたルウゼが再びやって来たと侍女のジェーンに知らせれ、メイリアは本にしおりをはさんで丁寧に閉じ、立ち上がった。

「メイリア様におかれましては、ご機嫌麗しゅう……」
「ルウゼ様、あまり堅苦しくなさらなくても結構です。そういうのは、苦手でしょう？　私もあまり肩の凝る挨拶は好きでないです。ですからどうか楽になさって」
「――――。……では、そのように」

メイリアはお茶を一緒に飲んでいたときから感じていたことを述べた。

彼女――ルウゼの言葉遣いは軍人が貴人に接するそれとしては完璧である。固い姿勢は崩さずに、完全に頭を下げるニュアンスを持つ。

しかしルウゼは総将軍であり、その立場の者が従うべきなのはただひとり、国王のみなのである。

それにメイリアは真実、堅苦しいというかそのような身分だけの主従に辟易している節が有る。おそらくそれは視線に媚や諂(へつら)いを滲ませて、王族という特殊な身分を利用しようと近づいてくるそのような輩がそろいもそろって、ルウゼが使っていたような完璧な“宮廷語”を使っていたからだろうと推測される。

「メイリア姫、戴冠式での役目の件ですが第六団、並びにレイル殿下直属部隊に所属するシティル・リダート・スティコット小隊長に決定しましたが、なにか異存は？」

そのように、と言ったルウゼであったがやはり多少戸惑いがある。だから彼女は将軍職につくまで話していたような口調で話すことにしたようだ。これならだいたいの人は彼女の言っていることを理解してくれるだろうとルウゼは思ったからだ。

彼女は孤児院の出であるがゆえに、彼女の話し方は非常に所謂貴人にはわかりづらいものなのだ。

これはこれで多少堅苦しい感もするのだが、とメイリアはひとつ苦笑いをこぼした。

「ありがとう、ルウゼ様。私の望み通りだわ」

「……と、いいますと？」

ルウゼはメイリアの発した言葉の意味が理解できなかった。

――望み通り？　あの数千人いた騎士の中からこの姫君はシティル・リダート・スティコットが役目を勝ち取ると確信していたというのだろうか？　……いや、ありえない。

「あら、私言わなかったかしら？　その役目はきっとシティルという男が負うことになる、と。あなたが私の部屋から出るときに言った気がしたのだけれど……気のせいだったかしら」

「言いましたか？　私は――――覚えがありません。聞き漏らしたかもしれません」

ルウゼはぞわり、と背筋が何かに撫でられる感覚を覚えた。普通の人間ならそれは当然の感覚といえよう。

――いくらこの姫が聡明だからといって数千分の一である確立を言い当てることが出来ようか？　これは……もう常人の域をあきらかに超えている。

メイリアはそう言われる通り、神からすべてを与えられ賜ったようなものなのだ。すべては彼女の思う通り、彼女の望む通り。

――――――真珠姫、神の申し子。

しかしそんなルウゼの様子に気づくことも無くメイリアはにこり、と上質の笑みを彼女に見せた。

「いえ、でもありがとうございます。婚儀楽しみにしています、とぜひシティルという騎士にお伝えを」

「承知いたしました」

そのルウゼに見せたその笑みが、実は悪戯を成功させた小さな子供のようなそれだということにルウゼは気づいていなかった。

だってシティルがその役目を負うことはメイリアの壮大な悪戯の、ほんの一部であるから。悪戯が成功するための足がかりなのであるから。

ルウゼが退出してしばらくすると部屋の外が少しざわついている、と首を傾げているとジェーンが急いで誰かを扉の外に出迎えに行った。

なにかしら、と本を読みながら耳だけでことの次第を追っていると、ふと視線を感じたので顔を上げるとそこにはアルフィーネがいた。

「まぁ、アルフ！　忙しいのではないの？　おっしゃってくだされば私の方から出向きましたのに」

メイリアは急いで本を閉じると、嬉々として立ち上がりアルフィーネのそばによった。

「いや、書類の処理がだいたい終わったから少し休もうと思って。執務室じゃ休まるものも休めない」

休まるものも休めない、というのは執務室に居るなら仕事をしろ、と宰相であるエディンラタ侯爵フィシオンが書類を次々持ってくるためである。幼い頃からの知り合いであり、少しねじれた性格のフィシオンを面白い兄のように慕っているアルフィーネにとっては、

それを突っぱねるのはなんとなく気が引けるのである。

「ふふ、フィシオン様は手厳しいのね。ではお茶を用意してなぐさめて差し上げましょう」

そう言ってメイリアは自ら茶葉を選び、ティーセットでお茶を淹れ始めた。しばらくすると何とも言えない良い香りが部屋の中に充満し、アルフィーネを喜ばせた。

「アルフ？　あちらの続き部屋に護衛の方とリスト様もいらっしゃるの？」

「ああ、いるが」

「ではジェーン、お疲れでしょうから護衛の方にはお茶と軽食をご用意して差し上げて。リスト様にはこちらに同席するかを訪ねた上で、後は適宜にやって頂戴」

「かしこまりました」

その言葉にアルフィーネは目を丸くした。

なぜなら今までアルフィーネの側近であるリスト・ネッラ・ガングルフ伯爵を気にして気遣う言葉は多かったが、それを通り越して護衛にまで気をかけるという言葉をアルフィーネは聞いたことが無かったからである。

三つのカップをあたため終わり、茶を注ぐ途中メイリアは思い出したように話し出した。

「ねぇ、アルフ。騎士団のシティルという騎士を知っているかしら？　たしかレイル様の直属部隊にも入っているそうよ」
「いや、わからない」
「そう？」

別段気にした風もなくメイリアは返したが、実はアルフィーネはシティルを知っていた。いや、正確に述べるなら“シティルという名前を持つ、大貴族スティコット家次期当主と目される男”を知っていた。
次期当主いわれている男の容姿は知っていても、その名まではアルフィーネは知らない。しかしもし、メイリアの質問が『騎士団のシティル・リダート・スティコットを知っているか』というものなら、アルフィーネの答えは真逆のものになっていただろう。

けれどアルフィーネの返答の中身はさほど重要ではなかったようである。実際今の質問は話題作りに他ならなかったようだ。

「で、そのシティルという騎士がどうかしたのか？」

やけに機嫌の良いメイリアが気になってアルフィーネは彼女に先を促した。
そのメイリアの笑顔を作っている要因がなんなのかを知りたくてアルフィーネは優しいまなざしを彼女に投げかける。
――アルフ、驚かないで？　私、剣が使えるのよ、得意なの。

メイリアはそれを意図的に隠していた訳ではないが、それを言うときを逃していたのは事実だった。良い機会だわ、といまこの時メ

イリアはすべて話した――自分が幼少のころからどういう訓練を受けて来たのかを。

「いまの世では、女も強くなくてはならぬと思う。淑女がどのような定義で決まるのかは人それぞれだろう。……しかしな」

アルフィーネの感想はそのようなものだ。
しかし国王という立場からでは、心中穏やかでない。
こんな華奢な深窓の姫君であるメイリアに、騎士団でも精鋭といわれる部類の者たちが負けた、というのは。

（正直、あんまりにも……――――）

「ふふ、私に負けたからといって騎士たちを責めてはだめよ。私に彼らが勝てるわけないのだから」

まるでアルフィーネの考えを見透かしたようにそういってのける彼女に、アルフィーネは脱力し、逆に彼女を頼もしく感じた。
くすくす、とのどを鳴らして笑う彼女の華奢な腕や手が、厳めしい騎士をまかしたのだと思うとなにかアルフィーネが違和感を感じてしまうのもまた真実であった。

「ふふふ、きっとシティル、戴冠式で恥をかくわね」

一度アルフィーネはこの言葉を聞き流した。しかしねっとりと絡み付くような違和感を彼は否定できなかった。
まるでメイリア自身が仕掛けたかのようなその言い回し。そもそ

も騎士団長ではなく戴冠式の役目を他の者に追わせようと言い出したのはメイリアだという事実。

（ということは、どういうことだ？）

「――――まさか、メイリア」

「ふふ、女性を蔑むと痛い目に遭うのだと思い知れば良いわ」

メイリアの壮大な悪戯の計画。それが照準を定めているのはシティルへの仕返し。さんざんメイリアを、女を馬鹿にしておいて、自分だけが戴冠式の例外として歴史に名を残すなんてメイリアが許す訳が無い。

あんな手合いで負けただけでそれを償ったと思っているなんてずいぶんおめでたい脳みそをお持ちのようね、と彼女はシティルを思い出し嘲笑した。

「これくらい、許されるわよね？」

一瞬にして表情から嘲笑を消し去り、優雅な微笑みを貼付けたメイリアはそれをアルフィーネに向けた。

しかしその微笑みこそ、アルフィーネの背筋に寒いものを感じさせる要因である。

女とは恐ろしい生き物だ、と。

祝福の日に。（1）

＊＊＊

今日はクラフィティア国王アルフィーネ・リンクス・ケラ＝クラフィティア並びに、スースティア王国第二王女メイリア・リュース・ミナ＝スースティアの婚儀が執り行われる日である。

念入りに占術師（せんじゅつし）に良い日を占わせ日取りを決め、すべてのことが円滑に滞り無く進むようにあらゆる手配をすませた。

そして今日、水歴１２５８年、水空（みずそら）の月、八の日。とうとうその日を迎えたのである。空は所々に流れる白い流れるように浮かぶ雲があるものの、その雲の白さがよりいっそう空を青く澄んで見せる。

メイリアの母国であるスースティアを含む各国から多くの使節団がアルフィーネとメイリアの婚姻を祝福するために訪れ、例を見ないほど盛大にかつて無い規模で婚儀が執り行われようとしていた。

大陸最大の国クラフィティアの国王が婚姻をするのであるから、各国使節はたいそうな贈り物、そして祝いの言葉をもってクラフィティアの王都メーデンへ参じていた。

スースティアの使節はシュトレイズ侯爵を筆頭とした使節団にメイリアの母サーシャ、それに兄のフロレンスが加わりやって来ていた。メイリアは久しぶりに家族と会えることがたまらなく嬉しかった。

今日がメイリアが成人してからはじめて公の場に出る日である。未だクラフィティアの宮殿内の人々にすら顔見せをしていないメ

イリアである故に、今日彼女はすこしばかり緊張していた。
だから優しくメイリアをいたわってくれるアルフィーネの存在は、なによりも彼女を安心させていた。

「国王陛下、準備が整いました。メイリア様とご一緒に」
「わかった」

控えの間にいる二人に侍女のひとりが準備ができたことを知らせにやって来た。それに短く返事をしたアルフィーネは一度優しくメイリアの方を撫でて、彼女をそっと立ち上がらせた。そして腕を差し出しエスコートをする。

今日は誰もが彼を羨み、そしてふたりを祝福する。
そんな日であるのだ。

† † †

大聖堂の裏側にある質素な控えの間。そこにふたりの男がいた。
灰色の髪を持つひとりの男は今日の華やかな雰囲気には到底とけ込めそうも無いほど異様な空気を発しており、動揺の色がありありと見て取れる。
もう一人の青灰の髪を持つ小柄な男は、ひとりが緊張している様をただただ呆れたように傍観していた。

ふたりはクラフィティア王国の大貴族スティコット家の者である。
名前はシティル・リダート＝スティコットとセオリオ・モールディア＝スティコットである。

シティルはスティコット家の嫡男であり次期スティコット家当主と目されるが、しかしそのような立場にある彼でさえ今日という日

は神経質にならざるを得ないようだ。

「……シティル、もう少し落ち着いたら？」

「そんなこと言うなよ――」

シティルのとなりにいるセオリオは割れ関せず、といった具合に知らん顔を決め込もうとしている。これはまるで、というよりは明確に彼――セオリオにとっては“ひとごと”なのだ。

「あがり性ならそんなの立候補するなよ」

「かわいい顔して、……お前は人が気にしてることを言うんじゃねぇよ」

「――俺も童顔気にしてるんだけど？」

そう言って呆れ顔をみせるセオリオはやはり我関せず、の立場を崩さない。シティルがなにも考えない猪突猛進型の性格なら、セオリオはのらりくらりと相手の言葉をかわすという性格だ。

スティコット家はクラフィティア建国時から続くとされる、由緒正しき大貴族である。スティコット家の当主は代々青灰色の髪を持つとされ、そのことの持つ意味は、英雄スティーリアの血を引くということである。その英雄スティーリアが青灰色の髪を持った女性であるというのは、大変有名な話である。

その英雄スティーリアが、始祖王であり征服王でもあるフィティアに忠誠を誓ったときに公爵位を与えられたのだ。

シティルの髪は灰色。

セオリオの髪は青灰色。

なぜこのような事態になったのかと言えばスティコット家の複雑な事情が関与していた。
現スティコット当主は男性である、がその髪の色は青灰色ではない。つまり彼は英雄スティーリアの血を継いでいない――――婿養子なのである。
しかしなぜ血を引いていない彼が当主になれたのかと言うと、スティコット先代当主はアディーリア・ヴィネ・スティコットと言い、現当主の妻であった。彼女は青灰色の髪を持ち、英雄スティーリアの生まれ変わりのようだと褒めそやされていた。

先々代は男児に恵まれず、しかたなく一人娘であったアディーリアがその爵位を受け継いだのである。そのアディーリアの婿としてスティコット家に入ったのが、現当主なのである。

しかし本当の問題はここからである――――アディーリアは子供を授かりにくい体質だったのである。彼女の両親も彼女以外の子供がいなかったことから見て、遺伝という可能性も無くはないが、おそらくは英雄の血を薄めないという圧力により近親婚を繰り返していた結果、そのような体質になってしまったということだ。

跡継ぎが出来ない、という最悪の事態はさけなくてはならない。スティコット一族は、前代未聞だが“婿に公な妾を持たせる”という策に出た。

男は愛していなくても女を抱けるのだ――――アディーリアの婿はすぐに妾である末席男爵令嬢を孕ませた。生まれた子供は青灰色ではなく、灰色の髪を持っていた。

しかし政略結婚とはいえ、婿をそれなりに愛していたし、なにより子供が好きだったアディーリアは自らが懐妊することを諦めなかった。
妾が赤子を産み落としてから三年後、遂にアディーリアは正当なスティーリアの血を継ぐ赤子を産んだ――それが、セオリオだ。

しかし安易な考えで妾を迎えた代償が降り掛かった。
セオリオがいなければ次代の当主は灰色の髪をもつシティルで決まりである。そしてその母として扱われる妾姫の地位は確固たるものになり、その生家である末席男爵家は力を増す。妾姫はその権力をみすみす逃すような愚か者ではなかった。

スティコット家と対立する貴族を妾姫は取り込み、あろうことかアディーリアと対立をはじめたのである。
妾姫にとっては自らの地位が上がり生家の力が増すという利点が、取り込まれた貴族側には直系の血を引かない者がスティコット当主になり、彼の家の権力が弱体化するという利点があった。

両者の利害が完全に一致した訳である。

その対立は長期化し、かなり続くかとも思われたが――――
それはアディーリアの突然死、という形で突如終止符が打たれた。
その突然過ぎる不審死の原因はいまも分かっていない。

結果として現在、アディーリアに代わりスティコット一族が妾姫と水面下で次期当主争いをしている。

そして件の当人であるシティルとセオリオはその争いを見て見ぬ振りをして過ごしている。

「シティル様、お時間です。用意を」

「――――わかった」

準備のためにシティルを呼びにきた女官の言葉にすこし顔をこわばらせたあと、ひとつ返事をかえした。重そうに腰を上げて、ため息をひとつ。

「じゃ、シティル、俺は表から見てるから」

表、というのはスティコット家にあてがわれている観覧席のことである。

にこりと笑ってそれだけを伝え、シティルを残してセオリオはその場を去った。

† † †

アルフィーネとメイリアの婚儀が行われるのはクラフィティア国教会である。

ある時代の王が呪縛のような信仰から民を解放するために、と国教会をつくったのだ。乱された神官は排除され、力ある清らかな者だけが成ることを許される神官という、神官の本来あるべき姿を取り戻した教会は、いつしか国のものではなく民たちのものとしてとらえられることが多くなった。

故に普段は王族すらも簡単には立ち入る事のできない、ある種の聖域のようなものと考えられている。

四隅が簡単に見えないほどの大きな空間である大聖堂は、まさに国教会の中心といっても過言では無い場所だ。その普段は聖域として立ち入りが禁止されている場所に、今日ばかりはたくさんの人たちが詰め寄せていた。

招待された貴族たちはもちろん、王そして新王妃を慕う多くの民たち。民たちは大聖堂に入りきらず、その外にもたくさん溢れている。

その様は、アルフィーネとメイリアが民にこれ以上無いほどに好かれているのだということを各国使節、貴族に示していた。

今日の今日まで顔見せをしなかったメイリア王妃。朝賀（あしたが）にも出なかったため、王宮仕えでも、アルフィーネの側近やメイリアの側仕えしかその容貌を知らないにも関わらず、しかし彼女の容貌の噂は城下町をにぎわせる話の種としてよく知られていた。

――“民衆に腰を折った心優しき姫君！”

――“黒髪の真珠姫は民の味方！”

この噂はほとんどの王宮仕えですら知らない彼女の容貌をなぜ民が知っているのか、とアルフィーネを不思議がらせたが、なにせメイリアは普通という言葉の似合わない姫である。アルフィーネはもう彼女の大きさを測ろうとすることを早々に諦めた。

《静粛に！　これよりクラフィティア国王陛下ならびにスースティア第二王女殿下の婚礼の儀を執り行う》

こうして歴史の一幕が刻まれる瞬間（とき）がはじまりを告げた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9715p/

水端の姫君

2011年10月7日22時24分発行